

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

padding generation

## 【作者名】

スリリン@bk

## 【あらすじ】

中学生の頃。

小学生の時にいじめられた経験から、人と接するのが苦手だった主人公汐風裕司。

汐風はそんな自分を変えるために、近くの高校ではなく遠く離れた高校に入学する。

小峰暁との出会いで、汐風は少しずつ変わっていく。

小峰の幼なじみで、もうひとりの主人公椎名結華はあるトラウマを抱えていた。

椎名が好きになった相手を見つめると、その相手が突然！

『何かに怯えるように、体を縮みあがらせて動かなくなる』

という現象が起きて、それがきっかけで恋することがトラウマになっている。

そんなふたりの主人公は出会うことになる。

## 変わるべき季節（トキ）

### Chapter 1 “変わるべき季節（トキ）”

中学生の頃。

小学生の時にいじめられた経験から、人と接するのが苦手な部活にも入れなかった。

友人の話題に入りたくても、話を振ることもなく。

遠くで話を聞いていただけ。

好きな女の子がいても、告白すらできなかった。

下校途中に同じ電車に乗り、一緒の車両に乗るだけで精一杯だった中学生の自分。

それだけで、気持ちは満たされていた。

そんな感じだからか、友達もできない。

幸いといえば勉強ができたため、いじめの対象にはならなかった。

干渉されなかったとも言える。

そんな暗い自分の性格がイヤで、近くの高校には行かない。

そう決めた！

自分の生き方をパツと変えたい！

誰も自分の過去を知らなければ、フラットな視線で接してくれる。

最初の一步さえ明るく踏み出せば、大きく変わるハズ！

両親に頼んで、遠く離れた地で1人暮らしの許可をもらった。

そんな裕福でもなく、至極普通の家庭なのに一生で一番のわがままを許してくれた。

入学式。

風が木々を揺らす。

花びらはそっと、頬をなでる。

ふわっと桜の散りゆく姿を横目に見ながら、そう思った。

通勤に急ぐ人々を横目に、薄紅色の桜は花びらを振りまいている。

ここは浄心高校『浄心』とは法名であるが、決して崇高な高校ではない。

スポーツが盛んで、男子ラグビー部は県屈指の強豪で女子バレー部は全国大会の常連。

クラス分けして名前順で並ぶと必ずと言っていいほど、お互いの自己紹介をする。

正直苦手だが、変わらないといけない。

「おう、オレ小峰暁（こみね さとる）よろしくなー！」

軽々しく、それでいて親しげな声をかけられた。

それに同調するように、自然を振る舞って。

「お、オレー！汐風裕司（しおなぎ ゆづじ）よろしくなー！」

少し噛んでしまった…。

人の目を気にする自分は少し気が動転すると、じっくり相手を見つめるクセがある。

「そんなキツイ目で見るなよお。気楽に行こうぜー！」

彼はそう言っつて、夕焼けまで遊んだ昔からの友達みたいにたわいのない話で楽しませてくれる。

入学して間もない頃。

小峰と屋上で昼食している時、中学生までの自分のことを思い切っつて言っつてみた。

「こ、小峰、あのね…」

「暁でいいよ。もうそんな他人行儀の間柄じゃないだろ？」

「そうなのか？入学してそんな日も経つてないぞ？」

「いいんだよ。こうやって、昼飯を一緒に食べてる時点でもう関係ないだろ」

「そっか。じゃあ、今から話すことで、また他人行儀に戻るかもな」

「ふ〜ん。オレは変わらないと思うけど、話してみなよ」

「オレがこんな遠くまで来たのには理由があるんだ。それは、部活が盛んで名門だからという理由じゃない。オレは…中学まで人と話すのが…人と接するのが下手だったんだ」

「それは人と接するのが、キライだったからじゃないのか？」

「ううん、そうじゃない。むしろその逆。コミュニケーションが下手だったんだ。クラスメイトと話そうにも話の輪に入るだけで、精一杯。話そうにも、今こうして小峰としゃべるより遥かに劣るくらいしか…話せなかった」

「そっか。今、お前と話てる感じでは想像もできないな」

「それは小峰の話が上手いんだよ」

「て、テれるな…ハハハ」

「そんな自分がイヤで、ここに引越してきたんだ」

「そっか、そういうことか。言っちゃ悪いが、お前はそこまで部活とかやりたそうに見えなかったから何か別の理由があると思ったけど。そういうことだったんだ」

「それは言いすぎだろ！それなりに体力はあるよー！」

「それはすまない。ん？それにしてもそのツツコミのスキル。前の学校では活かせなかったのか？結構いいセンスだとは思っけど」

「これをツツコミと勘違いする小峰が不思議だよ」

「逆転の発想とまではいかないが、今のはツツコミに値するよ」

「なにそれ？ヘンじゃない？あはっ」

そう言って、お互い笑ってしまった。

「ハハハ…。ほら、こう話しているうちにお前とはもう友達になってるんだぜー」

「そうなのか？実感が湧かないけど」

「いや、もう友達だろ」

思わず、言葉がでてこなかった…ちょっと恥ずかしい。

小峰は話を続ける。

「オレだったら見知らぬ土地に行って、自分を変えようなんて…オレは怖くて出来ないよ。それを実行しようって決心して、今こうやっている汐風裕司という男を尊敬するよ」

「あ、ありがとう」

「もう小峰なんて呼ばずに、暁でいいよ。オレは裕司って呼ぶからさ」  
オレは少しためらって、しばらくした後にしこし大声で言った。

「さ、暁！」

「おう、裕司！話してくれて、ありがとな」

「うん、これからもよろしく」

そんな春のほんわかした空の下、人生で初めてまともな友達ができ  
た瞬間だった。

クラスは48人で、8クラスもある。

暁とオレは教室でも名前順で机もタテに並んだ。

暁は地元なのでクラスにも友人がいっぱいいて、男友達を何人か紹  
介してくれた。

最初に不安だった『友人を作る』ことは暁のフレンドリーな性格で  
救われた。

まだ自分から声をかけるのは抵抗があって、ついモゴモゴと口にも  
ノが詰まる。

「あっあの…」とか。

「そ、その…」とかで始まる。

それでも。

「どうした？」

「なにになに〜！かしこまっちゃって〜！」

と明るく接してくれる友人たちにはそのたびに心の中で感謝して  
しまう。

鼻がムズつとする5月。

友達と呼べる男子とも普通にしゃべれるようになり、自分の素が出  
せるようになっていた。

人は『習慣』という不思議な力によって、不安要素を補える仕組み  
になっているようだ。

チャイムギリギリに走り込んで来て、自分めがけて必死に駆けてく  
るひとりの男。

「裕司、今日の数学の宿題見せてくれー！」

またか、と思いつつ暁にノートを見せる。

「暁さあ。部活に精を出すのはいいが、それなりに勉強もやれよ」

「まあまあいいじゃん！って、二二二間違えてるぞー！」

人の宿題を見せてもらいながらのダメ出し…。

「文句あるなら、見せてやんないからな」

「そ、そんなあ〜」

暁はラグビー部に入って、ウイングという足の速さが決め手のポジションをやっている。

もうすでにレギュラーを獲得しているのだからすごい！

オレはまだ部活に入るのをためらっていて、気付けば5月になっていた。

少し焦らなければいけないのだけど。

1カ月も経つと入りづらいし、やる気も出ない。

これが世間で言う、5月病なのだろうか。

## 見つめるその先に

Chapter 2 “見つめるその先に”

最近気になる男子が同じクラスにいる。

学校に入学して半月もたたない頃。

ワタシはお昼に学食を食べすぎて、お腹がいっぱいだった。

そんな最初の午後の授業。

春風に誘われて窓の外を見ていたら、いつの間にか眠ってしまった。

歴史の時間はそれじゃなくても眠くなる。

「え〜っと…椎名結華（しいなゆか）と言ったかな？」

夢の中でワタシを呼ぶ先生の声したが、気付かずに眠っている。

「結華〜。先生に呼ばれているよ！起きなよ」

「う…うん。だから、もうお腹がいっぱいなよ…」

となりの席では中学から一緒の伊吹奏（いぶきかなで）が必死に呼ぶのに対し。

これもまた夢の戯言だと思って、満腹なのを理由に流していたら

…。

「椎名あああ〜！」

いつも物静かで、優しいような老教師が声を荒げた。

「はい〜」

ゴスツ！ガツシャーン！

ワタシはビクツと咄嗟に立ちあがって、その衝撃で水を打ったように教室は静かになった。

ワタシは呼ぶ声にすくみあがって、誰に命令されたワケでもないのに“起立”する。

正しくはイスを引いて立ったワケではないので、“起立”はできていない。

机に両ヒザが当たって、垂直に倒れた。

そのヒザの痛みでワタシは我に返った。

「椎名君、君は私の授業をなんだと思っているのかね？」

「はい、なんとも思っていないません！」

たしかに我に返ったけど、少し寝ボケていたため自分でも想像できないくらい軽率な言葉を発してしまった…。

それで静かだった教室がクスクスと笑い声になり、そして爆笑の渦と化した。

笑いの渦がおさまりかけた頃。

老教師は血圧が上がリ、頭に#マークを浮き出させた。

完全にキレた様子。

「椎名ああああ…」

と老教師が怒鳴った瞬間、チャイムが鳴った。

いち教師としてはもっと叱りたかったろうに。

まさかのチャイムに邪魔されて、呆れ顔になった。

「もうよい…。次はしっかりと、授業を受けるんだぞ」

この時は職員室に行くのかと内心ドキドキしていたので、その一言にはホッと一息。

先ほど倒れた机を直しながらも時折、悲痛な声が出てしまう…。

「痛っツツッっ」

学校の机はもっとソフトに作るべきだと思っ。

「椎名、さっきのはウケたぜ…」

チッ！とワタシは舌打ちをした。

あの恥辱をいちいち冷やかしに来るのはアイツしかいない！

いつものようにその標的に振り向くなり、拳を振りかざし。

「いちいちつるさいわね…小…峰？」

ゴスッ！

渾身の一発をかましたけど、いつもと拳の感触が違っていた…。

ワタシが殴ったのは想像していた小峰の顔面ではなく、知らない男子の顔面だった。

そのまま男子は大の字で倒れた。

「あ、あの…「J」「Jめんはれこ…」



知らない男子の後ろには、標的になるハズだった小峰が隠れていた。

小学生からの付き合いの小峰は防衛本能から、咄嗟にその男子を壁にしていた。

「だ、大丈夫だよ…」

ヨロツつと彼は立ちあがって見たものの、あまり平気そうではない。

ワタシは申し訳ない気持ちでいっぱい、何度も謝り続けた。

小峰はその横で間一髪難を逃れて、飄々としている。

ワタシは小峰の胸倉を掴んで。

「小峰…あんた、他人を壁にするとはなにこと？信じらんない！」

小峰は冷や汗をかきながら。

「いやあ、椎名が殴ってくると思ったから…っい…」

「あんたってヤツは！」

と続けて言いたいことを遮る、いやむしろ抑えるように。

「大丈夫だから。ちょっと驚いたけど、椎名さんだっけ？はじめまして、オレは汐風裕司よろしくね」

殴られてもなお、平然と自己紹介をする彼。

男子の胸倉を掴む女子ははしたないと思い、小峰から手を引いた。

「わ、ワタシは椎名結華！」

第一印象がコレでは、暴力を振るう女子だと思われて敬遠されてしまっ…。

もう遅いけど。

「ねえ、ヒザ大丈夫？血出ているよ…」

「あっ…えっ？」

自分のヒザを確認したら、片方からダラダラと血が流れていた。

あまりの衝撃的な老教師の叱咤はワタシへのダメージを精神的だけになく、肉体的にも及ぼしていた。

そう思うと、叱咤とは凶器とも思えた。

すぐに手持ちのティッシュで抑える。

「ああ…っん。」のくらい大丈夫だから

「裕司、大丈夫だって。椎名さんはなんたって、頑丈なんだから」

何の反省もせず、尚且つねぎらいもしない小峰に憤りつつ。

間違えて殴ってしまった男子にはじめて女の子として扱われて、ドキッとしました。

バスケットが好きで、スポーツが得意なワタシ。

昔からヤンチャな「オトコオンナ」としてしか見られなかったため、心配されるのがすごくうれしかった。

これが気になる男子、汐風裕司との出会い。

## 勢いにまかせて

Chapter 3 “勢いにまかせて”

まったく部活に入る気をなくした。

オレはG・Wを迎えている。

浄心高校は部活が盛んと伝えた通り、ホントに度を超えて“盛んだ。”

せつかく、できた友人も『春合宿』という名目でみんな休みがない。。。結局、家でまったりとするしかなかった。

これでは前の自分と変わらないじゃないか！

そう思い、意を決して人生初のバイトを始めてみることにした。学校の校則では。

『バイトは社会を学ぶことの出来る場。』

一般常識範囲内のものであること。

学業や部活に支障をきたさなければ、よしとする。

学校休学時以外は週に3日以内まで。

それを守れなければ、それ相応の罰を与える事にする『

“社会を学ぶことのできる場”というOKサインを出しながら、後半では“学業や部活に支障をきたさなければよしとする”とか。

“週に勤務3日以内まで”と学校生活のリズムを崩さずと言っておいて、しっかりと週3日というボーダーラインを引くのがなんとも堅苦しい。

それに“一般常識の範囲内”っていうのと、“それ相応の罰”が気になる。

常識っていうのに反するバイトは女子で言う“ホステス”や“キャバクラ嬢”。

男子なら“ホスト”や“闇金融”の類を想像してしまっ。

一応この『バイトやりますのでお願いします』という『承認』が必

要なので、前記をやるつにも土台無理な話だ。

『自分の知らない社会勉強になる』と思ってしまうのは『思春期のサガ』というものだろう。

それに罰って、“停学や退学”もありえるということですよ？

校則を読み解くと。

『バイトしてもいいけど、しないでくれたらうれしいな』というのが、ウラ側に見え隠れするのは気のせいだろうか…。

とりあえず、バイト専門誌“0円”を片手に探しはじめた。

校則に乗っ取って、週3日&一般常識の範囲内と考えればかなり絞れてくる。

年齢制限のない飲食や接客をメインに考えてみて、“KFC”が目がいった。

あの揚げた鶏を売る老舗チェーン店だ。

早速、電話をしてみる。

T R R r r r r …。

「はい、KFC駅前店です」

「バイトの広告を見て、お電話させて頂いた。汐風裕司と申します」

「わかりました。バイトの面接ですね。では、面接の日は5月1日ですが。いかがでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

「では、午後3時はいかがでしょう」

「はい、それでお願います」

「では、5月1日午後3時に面接をします。もう一度、お名前と電話番号を…」

そして無事に通話は終了。

しかし、こんなオレでもうまく話せるように最近のバイト情報誌はしっかりと電話時の対応パターンを分かりやすく説明してくれるコーナーがあるのは助かる。

うまく対応できたのは、このコーナーのおかげだと思う。  
心から感謝したい。

しかし、問題は明日の面接。

オドオドしないか、自分としては少し心配。

5月1日、バイト面接の日。

KFC 駅前店に行った。

そこで、面接担当の女性スタッフに駅前店とは離れた貸しビル。いわばスタッフルームに案内された。

午後3時面接開始、女性スタッフと向き合って座った。

「ではまず、勤務希望時間と曜日を教えてください」  
いきなり！

まさかの“採用します”という意味合いを込めた聞き方に正直、虚をつかれつつ。

「基本的に部活はしてないので、いつでも大丈夫です。時間は夜間でお願いします。ただ、学校の規則上週3日までにしてください」と返答した。

朝が弱いからとは、ちょっと言えない。

「わかりました。基本的に接客は女性がしますので、あなたは裏方つまり中での調理担当となります」

自分としても調理担当の方が、都合がよかった。

やはり人前での接客は緊張する。

「はい、お願いします。」

「毎週シフトが変わる形ではありませんが、週3日以内で承ります。採用結果は今日連絡いたします。では、これで面接は終わります。何か質問はありますか？」

さっきの言葉が気になったので、聞いてみる。

「あ、あの。勤務希望時間と曜日を教えてくださいってというのは、もう採用って意味ですか？」

「いえ、面接するみなさんに聞いています。採用するって、意味じゃないんですよ」

なんだ、みんなに聞いているんだ。

あとひとつ気になることがある。

あまりにも個人情報というか、まったく人格のことを聞かないので

いつも使わない自分の呼び方で聞いてみた。

「もつひとつ。僕個人の性格とかは面接では聞かないんですか？」  
すると女性スタッフは少し考えながら、今までの口調とは変わったしゃべり方になった。

「はつきり言つと、今は人手不足って上に(上司)に言われているのよ。  
だから、基本は見た目が悪そうじゃなければ“採用”っていう安易な感じなの」

まったくもってテキトーだ！

一瞬にしてKFC駅前店が怖くなった。

それは“ゴロつき”や“フダつき”が居てもおかしくないってことじゃないか！

履歴書だつて真実とは限らないんだし…。

「そうでしたか、僕からの質問は以上です」

わかった風に流してみたが、先のことを考えると動揺してしまう。  
が！表情に感情が出ないタイプなので、バシてはいないだろう。

「では、以上で面接を終了します。じゃあ、“あとで連絡するから”これからよろしくお願いします」

えっ！今なんと？

そして自分の脳の中で巻き戻して、冷静に再生してみる…。

“あとで連絡するから、これからよろしくお願いします”。

採用された…。

座っていた自分は色々モヤモヤした感情よりも先に、立って一礼していた。

「よろしくお願いします…」

先の不安よりも、はじめて受けたバイトが受かった事のうれしさが勝った瞬間。

そのまま帰り、連絡はものの1時間で先ほどの女性スタッフから採用するという電話がきた。

続けて。

「汐風君、明日空いている？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ明日、午後6時半に今日来たスタッフルームに来て」

「はい、わかりました。よろしく願いします！」

通話はそれで終了。

まったく変な緊張もせず、人と話せるとは。

しかも、初対面の女性と話しても大丈夫だった自分には驚いた。

面接をすることで、色々勉強になるものだ。

もう人と話すのにも慣れていたんだなあ…。

さて、明日からバイトだ！

担任の宮間（みやま）先生にバイトしますという承認の電話を入れ  
たら、あっさりOK！

「もしもし、宮間先生。KFC駅前店でバイトすることになりました」

「そうか。一応、バイト先の連絡と勤務先はG・W明けにでも持ってきて  
てくれ」

「はー」

通話はそれで終了。

でもなぜだろうか？

なぜこうもあっさりと、バイトをOKしてくれたのか…。

バイトを始める上ですべてが順調すぎて、怖いくらいだった。

翌日その理由が明らかになる。

## 気付かないうちに

Chapter 4 “気付かないうちに”

G・Wなのに、なんで合宿があるワケ？

「結華！何してんの？置いてかれちゃうよー！」

奏にそう言われて、立ち止まっていたワタシはまた走り出す。

今は春合宿の真っ只中で、せっかくの連休が台無しになった。

片道5kmの走り込みで奏と併走しながら、足が悲鳴を上げていた。

あと少しなのに…。

やっと到着した。

でも、まだ終わりじゃない。

息も切れ切れなのに、今度は屋内でパイロンを並べてドリブル30

セット。

フリースロー30本（入るまで）スクリーンアウト…。

これ以上はなにをやっていたのか、まったく覚えていない。

もう、倒れそう…。

午前練習終了。

もうですでに、身も心もへトへトだ。

しかし、奏は元気だった。

「ねえねえ、結華！今日のお昼オムライスだった〜」

「まったく、奏はお子ちゃまだな…。ふふ」

「うん！オムライスは体も心も癒すよね〜！」

ワタシは奏のその元気に癒されるわ。

恥ずかしくて、言えないけどね。

オムライスを男女総勢200人のスポーツ部員が一斉に食べはじめる。

それはもう、ものスゴイ光景。

場所は長野。



しっかりとした、屋内&屋外の練習施設がある。  
すべての部員が各々鍛錬して、己に磨きをかけている。

まだ少しばかり寒いくらいで、たまに霧がほわっとかかる。

奏やチームメイトと一緒に昼食を食べながら、ふと汐風裕司を思い出していた。

そう衝撃的…いや、衝撃を与えてしまった出会いからずっと。

汐風裕司が気になって仕方がない。

「バスケット部の1年は食べ終わったら、シャワー浴びること。そして、午後の練習に備えること！」

「はー…」

食べ終わった食器を片手に、バスケット部女子キャプテンがそう声をかけてきた。

この高校の先輩は、実に人間が出来ている人が多いなあと感じた。

ワタシもそれを目指し、日々それに応えられるようしっかりと努力をしている…つもり。

「結華って、昔から好きな人に告白できずに逃げられるよねえ」

隣でシャワーを浴びながら、奏は言った。

この天然女子高生め！

人の心を見透かしたように…。

「ちょっと、奏！どこからそんな話題が吹き出てきたの？今日そんな話してなかったでしょー！」

「だって、今日の結華…なんか練習に身が入ってないから。ちょっとグサッとくるようなことを言ったら、やる気出るのかなあって思ってた」

「なっ…そ、そんなこと…」

「ははーん。その顔は大当たり！って、感じだね」

図星だった。

中学時代に好きな男子がいた。

このサッパリとした性格のワタシもスパッと告白できない。

いつまでも、モジモジと遠くから見つめていた。

でもなぜだか、見つめているだけでその好きな男子は突然……。何かに怯えるように……体を縮みあがらせて、動かなくなりその後は逃げられてしまう。

好きな人がこれまで3人いて、3人とも似たような症状が出ている。

ワタシが見つめると、恐怖に苛まれるというウワサは一気に広まった。

それが原因で、好きな男子はワタシの姿を見ると逃げていった。

女子には『知り合いにいい霊媒師いるよ?』とか、『催眠療法受けてみたら?』とか言われる始末……。

自分の体に何も別状はないのだけど。

そんな気にされたり、怖がられたりしても正直苦笑いしかできなかった。

それでも小峰暁は相変わらず、昔とちっとも変わってない。

本人にはこんなこと言えないけれど、それはすごくうれしかった。

「いくらやる気がなくても、そんな過去の話を振らなくてもいいじゃない……」

「はあうう……。結華様怖い」

「まったたく……。先に出るよ!」

奏も奏で親友をからかうなんて、もう……。

ブツブツ言いながらも、ちゃんと着替えて身だしなみを整える……さすがワタシ!

シャワー室をあとにしてコーヒー牛乳を片手に持ち、サラリーマンスタイルでゴクゴクと飲みほしていたら。

「よっ! 椎名! いい飲みっぷりだな! どうだい、調子は? まさかへバって午後の練習休むとか、言い出すんじゃないだろうな?」

いつものように小峰がワタシをからかいはじめた。  
でもここは女子の主張を言いたくなり。

胸を張って言った。

「仕方ないでしょ。女子は男子と違って、体力がないんだから!」

「まあ、そうだな…。そう言うオレもヒザがガクガク言っているぜ…  
ハハ…」

いつもなら殴っているところだけど、小峰もかなりのダメージを負っているようだし勘弁してやるか。

「さすがの常勝ラグビー部だね。いくらバテない小峰も音をあげるワケだ」

たまには小峰にも気遣ってあげないとね。

そう言葉をかけた直後。

「椎名は体力もないけど、発育もよくないなあ…。」

ジッとワタシの胸を見て、一番気にしていることをサラっと言った。

「人がせっかく劳いの言葉をかけてあげたのに、アンタは劳い＝暴力で欲しいワケね！」

いつものように振りかざす拳であったが、疲労のせいか力が入らない。

小峰の頬をちゃんと当てるので、精一杯だった。

「いつもの椎名のパンチが虫ケラひとつも潰せないほど、弱っちまっ  
ては仕方がないな。まあ、それも予想通りだがな、ハハハ！」

そう言って、去って行く小峰の背中はちよっと寂しそうだった。

「結華。また、小峰とケンカしてんの？…結華…？」

奏がその声を細めるのも、かすかに聞こえるほど…ワタシは想っていた。

「こっやって、汐風裕司にも触れ合いたいなあ。

いや、殴るとかじゃなくてね？」

そして午後の練習が始まった。

## 騒がしい時の流れ

### Chapter 5 “騒がしい時の流れ”

バイト初日。

スタッフルームには更衣室がある。

そこは男女一緒に女子の下着が散乱している。

よく見ると、それはとても若い子の感じがしない。

まさかのおばさんの下着…。

バイト初日から、テンションが下がるとは思いもよらなかった。

「汐風君着替えた？」

面接を受けた女性スタッフの溝口（みぞぐち）スタッフが呼んできた。

「あっ…もっ少しですー！」

早く着替えなくては！

そう、KFCでは平社員のことを名字のあとに“スタッフ”って付けると、スタッフルームに入った時に聞いた。

これからは溝口スタッフと呼ぶらしい。

着替え終わると、いきなりの重労働が待っていた。

壁一面に広がる扉がいつぱいついたドデカイ冷蔵庫から、1つ5kgぐらいある大きな紙袋を3つ。

そして、小さいピンク色の粉が入った小さな袋を2つ台車に載せた。

意外と筋力が必要みたい。

この4階の貸しビルから、駅前KFC店に台車を押していく。到着して、スタッフ専用の“勝手口”から入る。

そこは外の温度よりちよっと蒸している感じで、暑い。

奥には大きな揚げ物台みたいなのが、3つ並ぶ。

さらに奥にはデスクと冷凍庫らしきものがある。

そことは別世界な注文を受けるカウンターが見える。

少し戸惑いながらも、ワクワクしている自分。

スタッフやパートにあいさつしようと思つくと近付くと、溝口スタッフが呼び止めた。

「まず、あいさつの前に準備しましょう。まず、台車の荷物を冷蔵庫に入れて。」

「はい」

指示された通り、持ってきた台車の荷物を冷蔵庫に閉まった。

「はい、じゃあ次は手の消毒をしましょう」

カウンターと揚げ物台の間にある洗面台を溝口スタッフは指差した。

「お手本を見せるわ」

ハンドソープらしきモノを2プッシュ。

「指の間をキレイにヒジまでよくハンドソープで洗って、ペーパータオルでキレイに拭く」

それをオレは見よう見マネで手を洗う。

「じゃあその手をワタシがチェックするわ。手を開いて手のひら、手の甲。最後にグルっと、体を回って。はい、チェックOK！」

「溝口スタッフ！ヘッドカバー忘れてるよ！」

慣れた手つきで粉とチキンを混ぜ合わせながら、指摘する声がオレの後ろから聞こえてきた。

「そっか、ごめん汐風君。洗面台の上にある箱から1枚取って、それを被って」

言われるがまま、箱に手を伸ばす。

それを取って見ると、一見白いタンポポの綿毛のような布の帽子だった。

イメージとしては、給食当番の時に被る帽子かな？

「これは使い捨てで、中の作業をする人の髪の毛が食品に入らないようにするものなの」

「なるほどー」

「はい、これでよし！さてと、中で作業する人だけ紹介するわ。接客の人は自分で紹介してね！」

と言われても、そんな気楽に声はかけられないんだけど。

「じゃあ、まず。自己紹介して」

「は、はじめまして。汐風裕司です…」  
「やっぱ、最初は囁んでしまっつ。」

「じゃあ、ここからはワタシが紹介するわ。ここバイト歴が長い桑島（くわしま）君」

「おっ…おっ…」

「すごく恰幅のイイまそにおやっさんみたいだ。」

「もっひとりか野村（のむら）君」

「よろしくね」

「この優しいな表情、ほんわかとする口調…」

あれ？なんかどこかで見たことある！

そう思って、じっと見て気付いた！

「野村先輩ですよね？あの浄心高校の“仏”の生徒会長！オレ！同じ浄心の汐風裕司です！」

そっだ、この顔は朝礼の時に見かける野村先輩だ！

「よしてよ、ここでは野村君で通っているんだから」

とテレながら、小さな声でオレの耳元に囁いた。

“仏”の生徒会長。

それは常にニコニコ顔ですごく優しいイメージだが、よからぬウツサも耳にする。

でも、なんで生徒会長がバイトなんかしているんだろう？

担任の宮間先生がアツサリとバイトを承認したのも頷ける。

「なんだ、野村君は同じ学校の先輩なんだ。じゃあ、野村君が汐風君の教育係ね」

「はいはい、わかりました。では、溝口スタッフ例の件なんですが、これでチャラにしてもらえませんか？」

「えっ…な、何の「ト」かな？」

「とぼけてもムダですよ。みんなに言ってもいいんですか？」

「あ、あれはあなたの弱みなハズなのに…ハッ！まさか！」

「察しがいよいよで、フフ…」

「仕方がないわ、これでチャラね。これ以上の要求はのまないわよ！」  
「さすが、溝口スタッフ 将来いいお嫁さんになりますよ」

「そ、そんないいお嫁さんだなんて」

一見、堅そうな溝口スタッフがデレた…。

2人の間で何があったかはわからないけど、相当野村先輩は溝口スタッフを手玉にとっているように見える。

「おっと、今のやりとりは学校ではナイシヨね」

「は、はい…」

と言ったものの、野村先輩はなかなかおもしろそうだ。

「さて、今から色々教えるからね。よく聞いてて」

調理の一連の流れを教えてもらった。

そして実践。

何事もそうだけど、夢中になってやると時間が経つのも一瞬だ。

あと1時間でバイトも終わる。

「うん。スジがいいね！教え甲斐があるよ」

「あ、ありがとうございますー！」

そう、一息ついてしゃべっていると…。

「マサ…さっき聞いたよお〜！アンタ生徒会長なんだって！なんで、今まで隠してたの？」

接客で忙しかったであろうレジの女の子が声をかけてきた。

「隠すも何も別に教える必要はないし。それに生徒会長ですと行って、なんか態度変わるのも気持ち悪いし…」

「まあ、そうね。変わるワケないけど」

マサっていろいろは…？

ああ、野村先輩の名前の将之（まさゆき）から取って「マサ」なんだ。  
それにしても…キレイな女の子。

一見、チャラチャラしてる感じがするけど、見たままの性格なのか  
な？

「うらあえず、あいさしこめつしよ。」

「今日から働いている汐風です。よろしくお願いします」

「敬語とかいいよ、別に。ワタシは神楽吏沙（かぐら りさ）よっろしくうーねえ、下の名前は？」

「えっ？？裕司ですけど」

「だから、敬語はいいって。じゃあ、これからは“ユウ”って呼ぶね」  
「なんだ、野村先輩と親しいから、“マサ”って呼んでいたワケじゃないんだ。」

「この子のキャラなんだな。」

「桑島君、さつき溝口スタッフが呼んでいたよ」

「おう、わかった」

「桑島さんは“桑島君”なんだ。」

「何が基準なんだろう？」

「リサ、話をしたいのもわかるけど、それはあとにして」

「野村先輩が一声かけて。」

「なんだよお。もうちょっといいじゃん！ねえユウ」

「えっーっ、うん」

「早速、呼び捨てにされた。」

「ちよっとドキドキしてしどろもどろになっていたら、横から野村先輩が念を押す。」

「ほら、お客さん来てるよ。早く行った、行った」

「はい。じゃあ、バイト終わりにまたね！」

「そして、神楽さんは持ち場へと戻って行った。」

「野村先輩は気を取り直して。」

「さてと、基本はできていたからこの調子でね」

「はい！」

「ちよっと気になったから、野村先輩に聞いてみよう。」

「野村先輩って、神楽さんとはバイト長いんですか？」

「うん、付き合ってもう2年くらいかな？」

「へっ？」

「いや、それは聞いてないんだけど…ちょっとショックだな…。」

「なに真に受けてるの？ジョーダンだよ」

「あっ、ああ…ジョーダンでしたかハハ…」



一瞬、ジョーダンに聞こえなかったよ。

「まあでも、一緒にバイトして2年は経つかない？」

2年だけが、ホントなんだ…よかったあ。

「じゃあ、後片付けといきますか！」

野村先輩と清掃作業をはじめ。

蛇口から繋いだホースで床を洗い流す。

今日使った油を揚げ物台の下から抜いて、ショートニングという固形油を上から入れて明日の準備完了。

使った油は一斗缶のフタをして、冷蔵庫に入れて冷やし翌日に捨てる。

アツアツの油を入れた直後の一斗缶が、また熱い！

上の方を素手で持つなんて、グツグツいつている溶岩の上に自分の両手がさらされているような感じ。

前日に冷やした缶を外のゴミ収集箱に入れて完了。

気付けば、夜間のバイトのほとんどは高校や大学や専門学校生と学生が多かった。

他には主婦がメインで面接を受けた時の恐怖は一蹴された。

それにみんないい人達ばかり。

はじめてのバイトが終わって、貸しビルにみんなで歩いて行く。

更衣室は女子が先で、1人や2人ずつ入って着替える。

おばさん達は着替え終わると、そそくさと帰って行く。

自分が着替え終わったら、学生達やスタッフはひとつのデスクにイスを並べて雑談していた。

「コウモリっちぎなよ」

神楽に誘われて、そこにオレも混ざった。

ちよつど、自分も観ている月9ドラマ。

『夢の中へ墮ちる世界』の話で盛り上がっていた。

「そうそう。そこで兄貴ってことが、分かったんだよね」

そう野村先輩が言うと、その話に食らいつくスタッフ&バイト。

みんなにとって、野村先輩はムードメーカーなんだな。

オレもその中の1人。

学校だけでなく、そんな一面を見せる生徒会長はオレの憧れになっていた。

話は逸れて、個々に話はじめる。

「ユウも浄心なんでしょ？特に部活が活気あるって、聞いているけど」「オレはやってないけどね」

「そうなんだ。ワタシはテニス部で全然やる気のない部だから…浄心に通っているってだけでも、うらやましいな」

「G・Wすら春合宿と言って、友達はみんな合宿行っちゃったんだ。それでこのバイトを受けたんだ」

「そっか！まあ、寂しかったんだね」

「そこまで読まなくてもいいじゃないか…」

「これから仲良くしていこうね」

「うん、ありがとう」

第一印象と神楽の印象がだいぶ変わった。

ちょっとノリがよくて人の気持ちを読める女の子。

こんな子が彼女だったら、どんなに幸せだろうか…」

そしていつの間にか、24時を回っていた。

「じゃあ、帰ろうか」

野村先輩の掛け声で、みんなは一緒に貸しビルをあとにした。

みんな近所だからこんな時間でも大丈夫なんだろうけど、女の子は大丈夫なのか？

「神楽！」

「リサでいいって」

「ああ、ごめん。リサ、あ、あの…」

「なあに？」

「こんな夜遅くに帰って、親は心配しないの？」

「うん！だって1人暮らしだし。それにこうやってみんなと居るのが、一番居心地がいいんだ！」

「そっか、それなら安心…なワケない！」

「夜道…大丈夫？」

「うん。マサと方向一緒だから」

ズキン…あれなんだろ、今なんか胸が痛くなった。

「リサ、行」

と野村先輩が神楽を呼ぶ。

「うん…じゃあ、ユウまたね！」

「うん…気を付けてね」

そう明るくふたりを見送るけど、このモヤモヤした感じ……なんだろ…。

「この時ほど気持ち良く、それでいてしんみりした夜風はなかった。

## 平穩に響き渡る

Chapter 6 “平穩に響き渡る”

「人妻の昼下がり」

「うおお！洗濯物を干し終わったあとに玄関でインターフォンが鳴って、宅配のお兄さんが！お兄さんが！うおおおお！妄想してしまううう！」

ボソッと、つぶやく男子の横で悶える暁。

得も言われぬ妄想を掻き立てる言葉をつぶやくのは、角田真輝（つのだ まき）。

それに対して呆れながら、オレは角田に声をかけた。

「ツノキー！また暁を悶えさせて…。妄想というより暴走気味じゃないか…！」

「だって、暁の反応って過剰だから面白いのさ。さらにオレの一言を暁が妄想で拡大させて、スゴいことを言い放つ。そのたった一言で、こんなにも話が広がるなんて！一言ネタ冥利に尽きるってもんだ！」  
ツノキーとは、角田真輝の名前の『角』と『輝』という字をもじってできたニツクネーム。

本人は気に入っているらしく、自分からそう呼んでくれと初めて会った時に言われた。

それからずっと、ツノキ と呼んでいる。

「ツノキーもっともっとくね…！」

興奮冷めやらぬうちに、“おかわり”をねだる暁。

「この変態…！」

バシッと、教科書をまるめて暁を殴る女の子。

「痛いなあ。椎名あ〜」

「お昼休みになにへんな想像してんのよ！信じらんない…！」  
椎名さんをじっと物欲しそうに見つめる暁。

「な、なによ…その目は…！」

「もっと殴ってくれ！椎名あー！さらに妄想が浮かんできそつだ！」「バツカじゃないの！」

と言いながら、ちゃんと期待に応える女の子。

いや、期待に間違えて応えているのかも。

暁を殴っている女の子は椎名結華。

4月になって出会った、暁と幼なじみの女友達。

それを見て、ツノキーとオレは笑い転げている。

椎名さんには人間はここまで顔が潰れるのかっていうくらいのパンチを顔面にくらった。

それが椎名さんとの初めて話した時の“あいさつ”だった。

そんな夏服に衣変わりしたばかりの6月の昼休み。

以下、椎名結華。

ハッ！やだ！ワタシったら、汐風君の前でまたはしたくないことをしてしまった。

「し、汐風君。」「これはねー！」

あれ？

笑い転げて気付いてない…よかった。

いいのかな？

「結華！次、体育だよ！早く着替えないと！」

「あ…うん！わかった」

急く奏に呼ばれて、そそくさと女子更衣室へ向かう。

以下、汐風裕司。

「さて、オレ達も体育だし！早く行こうぜ！」

「いやいや、ツノキーがきっかけて時間潰れたんだよ！」

ちよつとツノキーを指摘してみたが、よくよく考えると時間を潰したのは椎名さん&暁ではないかとも言える。

体育は男女別だったけど、どちらも校庭での授業だった。

女子は走り幅跳び、男子はハードル200m走で校庭の端と端で行っている。

以下、椎名結華。

「はーっぎー」

先生の合図で前の子が走ってく。

だっ、だっ、だっ、だ！ズツシャー！

「2m25」

「つぎー椎名ー」

「行っきまーすー」

勢いよく助走をつけて、白線ギリギリで思い切り飛ぶ！

ズツシャー！

「結華ーこれスーいよー」

記録係の子は声がひっくり返る感じで言う。

お尻から着地したワタシはふと、後ろを振り返る。

結構な滞空時間を感じたけど、さて記録は？

「6、6m20…へっ…えっ？」

記録係の子はビックリしていた。

「し、椎名！今からでも遅くはない！陸上部に入って、全国を目指さないか？」

陸上部顧問兼体育の先生がワタシを勧誘してきたが。

「イヤですーワタシはバスケット部で全国制覇するのが夢なので！」

そんな誘いを一蹴し、座っていた場所に戻る。

「はあ…では次ー」

すぐく先生は残念そうだけど。

私を勧誘できなかった無念を吹っ切るため、仕事に情熱を燃やして野望を打ち切るかのような声を先生は出した。

「結華、すっごいね！あんなに跳べる人なんて、男子でもそうそう居ないよー」

ワタシの跳躍力を自分の自慢話のようにはしゃぐ奏。

「そんなことないって。やっぱり、日頃の練習がこうやって形になるのっぺいいよねー」

「うん ホントだね！あっ、次ワタシ？はーい」

そして、奏は6m30を軽々と記録した。  
さっきまでのワタシの記録を塗り替えた…。

とんだ天然女子高生だこと！

先生はまた勧誘している。

「いや、いいですよ！なんか、陸上部って地味なんで！」

やり過ぎた奏はちょこんとワタシの隣に座る。

「奏！あの断り方ってなに？それが最大の理由？バスケへの情熱はな  
いんかい！」

「へ？あっ…うん！まあ気にしない気にしない」

「コヤツ…トボけたな…。」

あとで聞いた話だけど、その記録は全国制覇できるレベルにあっ  
たらしい…。

ふと、男子の体育の授業に目をやってみた。

男子はハードル走か…変わっているなあ。

あっ！次は汐風君の出番だ！

たしか部活してないって言うていたけど、大丈夫かな？

以下、汐風裕司。

暁には体力はあるよと言ったけど、スポーツは苦手だったりする。  
でも、走ることにに関して自信はある。

とりあえず、隣の走者の暁には間違いなく負けるとしても卓球部の  
ツノキーには負けたくないなあ。

「なに見てんの？シオっち？」

ツノキーをじーっと、見ていたら…気付かれた。

シオっちとは、ツノキーがオレを呼ぶときのニックネーム。

「いや、ツノキーには負けたくないなあって、思ってたさ」

「なにをぉー！上等じゃないか！オレが勝ったら、シオっちの耳に  
ぶっくっするからな…！」

「ニクニク…いや、ニヤニヤしながら、ツノキーはやる気満々。」

「いやー耳だけはやめてー！」

耳は敏感なんだ！

自分で耳かきしても一瞬『はう！』って、なるくらいなんだ！  
「ほほーう、シオっちまさか…。耳が性感帯なんでは？」

そんなやりとりをしていると、体育教師が怒鳴ってきた。

「なにをしているんだふたりとも！もうみんな走っているぞ！」  
目の前ではみんなが走っていた。

5人中3人はもう中盤まで跳び、走り終わっている。

「じゃあ行くぜ！シオっち！レディー…GO！」

「いや、ちよ…」

ちよっと待て！自分の感覚でスタート切るとは卑怯だ！

って言いたかったけど、もうすでにツノキーは前を走っている。

ちよっと遅れたが、ツノキーには充分追いつける距離だった。

ただ、いつもと違う感覚が自分を襲った！

身震いする…感覚。

目の前ははつきりと、見えるはずなのに…。

自分の走る振動よりも、大きく世界が『揺れて』見える。

地震？いや、前を走るツノキーや暁は怯えている様子はない。

自分1人だけが確かに。

『揺れている』

うっ！気持ち悪い！

今すぐ止まらないと吐きそうだ！

走るのをやめて、そのまま座ってみた。

でも…まだ…。

『揺れている』

なんでだだろう、動悸とか心臓かなんかの病気かな？

うっ…！。

その場で気持ち悪くなって、嘔吐してしまった。

「おい、裕司！大丈夫か？」

先に走り終えた暁が駆け寄ってきた。

暁は自分を抱えて、女子の体育授業に目を向けている。

はつきりとはわからないけど、見ている気がした。

というのが正しいかもしれない。



「ま、まさか！アレはウワサじゃなかったのか？」  
暁は意味不明な言葉を発している。  
そして…そのままオレは気絶した…。

以下、椎名結華。

「あれ？男子誰か倒れているみたい」  
誰かがそう呟く。

ハードル走のゴールは女子に向かって伸びているから結構近いので、男子の現状は確認できた。

「あれって、汐風君じゃない？」

そんな声がワタシの耳にも入ってくる。

「結華、もしかして…汐風君を…『見つめて』なかった？」

奏が心配そうに、ワタシの行動に気付いて聞いてくる。

ワタシは確かに『見つめて』いた…。

汐風君のことを『見つめて』いた…。

でも…そんなハズない…。

「うっん。『見つめて』ない！」

ワタシはその場に座っていられなくて、グラウンドから校内のトイレへと走って行った。

そんな…またなの？

また“好きな人”を苦しめてしまうの？

ワタシの気持ちは届いても、ワタシは“好きな人”を怖がらせるだけなの？

これじゃあ…誰も…誰も…好きになれない…。

## 気付いたら

Chapter 7 “気付いたら”

起きると、そこは保健室だった。

カーテン越しにこぼれるオレンジ色…。

多分もう夕暮れなんだろう。

寝ている自分をイスに座った暁が心配そうに、見つめていた。

「気がついたか、裕司？」

「ああ…。もう落ち着いた。暁、もしかしてずっと付き添ってくれたのか？」

「いやいや、授業が終わってからだよ。オレがずっと付き添っていたら、気持ち悪いだろハハ！」

「そうでもない。案外落ち着くよ」

「そうか、はは。それはよかった。…あんな、裕司…。」

真剣な眼差しで暁は続ける。

「実は…ウワサだと思っていたんだけど…」

「ん？なんのこと？」

「裕司が倒れた理由は…体調を崩したんじゃないのかもしれない…」

「えっ？どうして？」

「まだ確認はしてないが、認めたくもないことだけ…」

「認めたくない？何を？」

「あなさ…」

暁が喋りかけたとき、保健室のドアが開いた。

「ユウ、大丈夫か？」

「あれ？“仏”の生徒会長？おはようっす！でもなんでここに？」

話を途中で止めて、野村先輩に挨拶をする暁。

「うん！ちょっとね。小峰君だっけ？」

「は、はい！名前覚えてもらっているんすね！」

「君の名前はラグビー部によく聞くからね。会えてうれしいよ」

「そんな！うれしいっすー！」

「うん とりあえず、ちょっと汐風君と話がしたいから、席をハズしてくれないかな？」

「はい！じゃあ、裕司。話はまた確認ができてから、伝えるよ」

「うん。わかった。暁、ありがとう」

「おう」

暁は野村先輩に一礼して保健室を出て行った。

野村先輩も心配して来てくれたのかな…。

「体調は大丈夫？」

「今はもう大丈夫です」

「うんよかった 実はね、オレ今日バイト入ってるんだけど。どうも生徒会の仕事が終わりそうもないんだ」

「は、はあ…？」

心配して来てくれたワケじゃないんだ。

「それでね！ユウに代わりに出してもらおうかなって、思ってさ。いいかな？」

「そういうことなら仕方ないですね。大丈夫ですよ」

「よし じゃあ、オレからスタッフには伝えておくから」

「はい！よろしくお願いしますー！」

「じゃあ、よろしくねー！」

野村先輩はそう言って去って行った。

生徒会の仕事かあ…。

そつだ、バイト行く前に今日のドラマを予約しないと。クライマックスまであと少しだし。

授業はもうすでに終わっていた。

保健室をあとにして、下駄箱方面に向かう。

すると、生徒会の先輩たちが前を歩いている。

生徒会も夏休み前なのに、忙しいんだなあ…。

しかし、歩く方面はまったく一緒。

先輩たちは下駄箱から靴を取りだした。

疑問に思ったオレは思わず聞いた。

「あの！今日、生徒会で仕事があると野村先輩から聞きましたけど…」  
「んっ？いや別にないよ。夏休み前に行事はないからね。期末テスト  
くらいだし」

「へっ？あっ…そ、そうですか…」

「ハッ！もしや！」

「ハメラれた…」

野村先輩の仏のような顔で、あっさりとはOKしてしまった自分がバ  
カのように…。

これが“仏”の生徒会長のウラ顔なのか…。

一度バイト替わると言ってしまったので、いまさら断れない。

いや、それ以前に先輩だし…。

オレは断念した。

「この報いは必ずどこかで晴らそう！」

「はあ〜」

そして、やるせない気持ちのままバイトをしている。

「どうしたあ。汐風元気がないぞー！」

「桑島さん…。今日は色々あって心がへトへトで…」

「ははは、オレより若いヤツが何言っているんだ」

「色々高校生にはあるんですよ…」

「いや、一応コレでも高3なんだが」

「えっ…う、うそだああああー！」

衝撃の一言だった。

恰幅がよくそれに言っちゃ悪いが、老け顔だしとても高校生には見  
えない。

「そうでしたか、それはすいません。てっきり30代半ばかと思って  
いました」

さらに言わなくていい言葉を続けて言ってしまったが、後の祭り。

桑島さんはシヨックを隠せないまま。

「い、いやいいんだ。正直、自分でもわかっているから」

桑島さんの目にはつつすら涙が浮かんで見えた…。

ホント申し訳ない。

「さ、さあ次のチキンを揚げなきゃ！」

気を取り直すように声を上げる桑島さん。

でも、場の空気は重い。

「おっはよー」ぞいまーす！あれ？今日、マサと桑島君じゃなかったっけ？」

場違いとも思える声の主はリサ。

レジのバイトの子は少し遅くシフトに入る場合がある。

「悪かったなあ、野村先輩じゃなくて」

「ユウ、別にそんなイヤな顔しなくてもいいのに」

少しグチっぽく言ってみだが、意外とやさしい言葉が返ってきた。

少しいたたまれない気持ちになって、事情を話した。

「実は野村先輩に替わってと言われて、それでオレが入ったんだ。生徒会の仕事があるって、でもそうじゃなかった。多分、今頃遊んでいるような気がする」

「そうなんだ。ウソをついてでも優先する用事って…。まさか！彼女でもできたんじゃない？」

「か、彼女…いいなあ。」

まったくもって、怒らなきゃいけない場面なのに羨ましい気持ちが勝った。

「もしそうなら、マサはこれから付き合いが悪くなるね。」

「どうしてそんなこと言えるんだよ。」

「現にこうやって、バイトをサボってんじゃない！仕事終わりの雑談も彼女との用事があつたら、そっち優先になるんじゃない？」

「そうだね…って、彼女居る前提で話しているけど…」

「マサはユウから聞いている話とか、接している感じだとあれはモテるわ！まあ、桑島君はすぐ帰っちゃうから、ユウとふたりっきりになる時間が多くなるかもね」

「おいおい、オレはそっちのけかよー！これは手厳しいなあ…ハハハ！」

「あ…。桑島君ごめんね！」

桑島さんは笑って流していたが、オレはリサのその一言が引っかけ言葉がでなかった…。

マサさんが居ないことで、ふたりでいる時間が長くなるっていいなあ。

「な、なに赤くなってるの？ ああ！ ヘンなこと考えていたんでしょ！」

「バカ、そんなことないよ！」

「はいはい！ 雑談やウワサ話はまたあとで。チキン足りないから、早く仕上げてね！」

溝口スタッフに促されて、その場はそれで終わった。

さっきのリサの言葉は少し気になる。

## 今までにない試み

Chapter 8 “今までにない試み”

「気分が悪いので、今日の部活はお休みさせて頂きます」

「大会が近いんだから、早くよくなってね」

監督はやさしく帰してくれた。

「ただいまあ」

「あれ、今日は早いよね？部活があるんじゃないの？」

「ううん、今日はなかった。大会が近いから筋肉を休ませることも必要だって、監督が言ってたから」

「そう。今夜は由美（ゆみ）ちゃんが遊びにくるから、逆によかったかも」

「そうなんだ。来たら部屋に呼んでね」

母が言う由美ちゃんとは、5つ上の仲良しの従姉妹。

「呼ばなくても、由美ちゃんなら行くわよ」

「そっか。そうだよな」

「結華、ちょっと顔色悪いわよ。どこか体調でも悪いの？」

「ううん。平気だから、心配しないで」

嘘って重ねねば重ねるほど、ちょっと心に引かかるなあ……。

明日はちゃんと部活行こうって。

ワタシは2階の自分の部屋に足を向けた。

これからどうしようかな。

こんなことじゃ、誰も好きになれないなあ。

あまりのシヨックでトイレまで走ったけど。

校庭にあるトイレの臭いあまりに強烈で外に飛び出して（間違つて男子トイレに入ったのも手伝って）逆にハツとして我に返った。

枕を両手で抱えながら、これからのことを考えている。

「結華！パアアアアースー！」

「は、はいーって、あれ？」

「ふふ、起きた？」

バスケの試合中みたいな感覚で手を構える。

手にはぬいぐるみが飛びこんできた。

目の前には由美ネエがクルクル回るイスを反対に座って、こっちを見ている。

どうやら、ワタシはそのまま眠ってしまったみたい。

「お、おはよう。由美ネエ…」

「遊びに来たら居るよって、聞いて。でも来てみたら、寝てるし。

バスケ全国制覇を夢見る結華が部活休むなんて、珍しいね」

「えっ、なんで？休んだって、知ってるの？」

「おばさんはいつも結華のことお見通しよ。多分思春期ねって」

母はほんわかしているのに…そういうところだけは鋭い！

奏といい、母といい周りは鋭い人ばかり。

「はは、そっかあ。ワタシ分かりやすいのかな？」

「えっ、今頃気付いたの？結華って、今何を考えているかがダイレクトに態度や表情に出やすいのよ」

「えっ…そっなの？」

奏や母が鋭いワケじゃなくて、ワタシが分かりやすいのか。

「なんかあったの？」

「…実はね、ワタシ好きな人がいるの」

「ほほう いきなり恋愛トークに発展！」

「まあ、普通の恋愛トークなら胸高鳴るよね」

「普通じゃない…って、コト？」

「うん、普通じゃないよ。だって、相手が…」

そっ言いかけたら瞳をルンルンさせて。

「うんうん イケない恋と分かっていても、止められないのよねえ。

ワタシもそっいう経験あるわあ。相手は先生なの？それとも、不倫？」

「この人はまったく、人の話を最後まで聞かない…」。

昔からそっだったけど。

「そっじゃなくて。ちゃんと話聞いてから、意見してよ」



「違うの？なぐんだ、残念」

「話…続けるね。それでワタシが今まで好きになった人は何人が居ただけど…」

「今回は諦められないってコト？」

「そ、それはそうなんだけど。それ以前に問題があつて」

「問題？相手には彼女がいて、略奪するとか？いいわぁ。それはぜひ、聞かせて」

「ちーがーうー！いや、いるか分かんないけど。なんで、由美ネエはそついつ想像ばかり働くの？」

「へへえ〜 なんてだろ」

「高校生をバカにしているとしか思えない発言だ！」

「大人からしてみれば、10代つてそのくらい魅力的な世代なのよ」

「自分だつて、大学生じゃん！」

「大学生でも高校時代とは違うのよ」

「そついつもの？」

「そう。部活やサークルは高校時代のような、キュンつとすることはないわ。だから、今の結華が羨ましい」

「大学に夢も希望もないのか」

「そついつワケじゃないんだけどね。それで！つづきは？」

「ワタシが好きになった相手は見つめると、異変が起きて倒れこんじゃうんだ…」

「な、なにそれ？心理学科を専攻しているワタシでも、そんな例を聞いたことないわ。結華それつて、ホント？」

「ホントかどうかわからないけど。周りに聞くと、相手にそついつ現象が起きているんだつて」

「ふ〜ん、それは困ったわね。何か解決方法はないものか…」

少し考える由美ネエは閃いたのか、大声で叫ぶ。

「そつだ！」

「な、なにー！」

ビックリして、ワタシまで大声で返してしまった。

「問題つていうのは、説く上で色々な方程式があるものよ。数学でも

あるでしょ？」

「どういう意味？」

「つまり色々やってみる。『行動に移してみる』＝方程式の近道ってこと。結華は今まで好きな人に告白とか、それに近いアプローチとかしたの？」

「で、できるワケないじゃないー！」

相手が倒れこんでしまうのに、そこまで行く前に諦めるしかないじゃないー！

「そうよね。結華は硬派に見えて、意気地ナシだもんね」

「そ、そういうんじゃないって」

「まあ、理由はどうあれ。これはワタシの勘だけ……」

由美ネエは話をしながらメモを手にとり、書き出した。

「好きな相手が結華に振り向いたら、その現象がなくなるとしたらー石一鳥じゃないっ！」

「うん、確かにそうだね。えっ！でも…それって、両思いつてことー！」

「そう、あっ！赤くなってる〜青春だねえ」

自分で言っておいて、なに赤くなってんだろ。

「まだ付き合ってる、ワケじゃないんだから」

「う、うめさ」

謝るっていうのは違ふ気がするけど。

「両思いになったら、その現象がなくなる可能性もあるってことー！」

「な、なるほど」

「そこで大事なのは結華が好きな人とは、どういう関係なのかってこと」

「どついう関係って、同級生だけど」

「ただ、同級生なだけ？そうなると結構時間がかかるなあ」

「同級生なだけじゃなくて、小峰の友達なんだ」

「幼なじみの小峰君と友達かあ〜。友達の友達なら、少しハードルは低いわね。交流とかあるの？」

「ちよ、直接はないけど。小峰が変な発言するたびに、そこに居たりする〜」

「その時の好きな人の反応はどんな感じ？」

「えっ！そんなのわかんないよ」

「そっか、じゃあ何がきっかけで好きになったの？まあ、この答えはカントンには出ないけどね」

「それは覚えてるよ」

「あら、意外ね」

「お昼ご飯を食べたあとに寝ちゃって、その後の授業で先生に怒られた」

「結華らしいわ」

ちよっとムツとしながらも、話を続けた。

「授業が終わったあと。その時ぶつけたヒザをさすっていたら、小峰がおちよくってきた。だから、拳を思いっきり振り切ったの」

「小峰君かわいいそう」

「でもね、小峰はそれを避けて、ワタシの拳はその好きな人の顔面に思いっきり入って」

「その感触が忘れられなくて、好きになっちゃったとか？」

「そんなワケないでしょ！人の好きな人をサンドバッグみたいに言わないでー」

「ふふ。さすが、結華のツツコミー」

おっと、落ち着こう由美ネエのペースに巻き込まれたらダメ！

「もう、話続けるよ。そんな目にあっても、ワタシのヒザを気にしてくれてそれで……」

「ふ〜ん。意外と好きになる瞬間って、そんなもんなのよね」

「そんなもん…なの？」

たしかに、きっかけとしてはすごく些細なことかもしれない。

「人を好きになることに理由なんてないって、よく言うけど。意外とスゴイ出会いって、感じじゃないからかもね」

「そうかも、スゴイ出会いってワケじゃない」

と自分では思っているけど。

「グッとくる瞬間とか、シユンとなる瞬間とか集計出ているけど。好きになる瞬間はわかんないものね」

「そうかも！ははは！」

「ねえ、不思議。ふふふ」

こんな単純なことで人は人を好きになるんだって、思った。

「まあ、ガンバリんさい。もうひとつ治す方法っぽいのはあるけど。それはまあ、保険”って、ことでまだ教えな〜い」

「ははは…へ？なんで？」

「それはヒ・ミ・ツ」

「由美ネエ、それ…古いよ」

「古いつて言うなあ〜」

「2人共〜！ご飯よ〜」

1階から母の声でした。

「は〜い」

## バイトの終わりに

Chapter 9 “バイトの終わりに”

「ふう。今日の仕事も終わったあ〜」

「マサの代理お疲れ〜ユウ。」

「おう、あとはゴミを持って行くだけだ」

営業時間が終わると、掃除をする。

そこで出たゴミを地下のゴミ捨て場に持ってくのが、最後の仕事。

「じゃあ、ワタシ先に行ってるね」

「おう〜」

ゴミを台車で持って行きながら、バイト中に言っていたリサの言葉が気になる。

“桑島君はすぐ帰っちゃうから、マサと2人きりになる時間が多くなるかもね”

あれはどういう意味だろうか、ちょっと期待してしまう。

まさか、オレのこと…なんてね。

そんなワケないさ。

話し方や言動からして、野村先輩を好きに決まっている。

オレは何を浮かれているんだか…。

ゴミを地下に捨てに行ったあと、スタッフルームのある貸しビルに足を運んだ。

スタッフルームは誰も居なくて、電気だけがついていた。

着替えようとして、更衣室に入ろうとすると…。

カギがかかっている。

ガチャ！あれ？誰も居ないんじゃないのか？

「ちょっと待って〜まだ着替えているから」

更衣室の中から女の子の声が聞こえる。

「あっ…」  
「めんなさい〜」

危ない！カギがかかってなかったら、オレは変態扱いされると

ころだった…。

待っている間は自販機で買ってきた缶コーヒーを片手にイスに座って、待っていた。

数分後、更衣室のドアが開く。

「ユウだったの？もう、更衣室が閉まっている時はノックしなさいよ」

「ああ、ごめんリサ」

「はい、空いたよ。ひとりじゃ心細いでしょうから…待っててあげる」

「へえ、珍しいこと言うんだな」

「珍しい？そっか、ふたりつきりになるのは初めてだもんね」

リサはそう言っていて、着替えた学校の制服を整えていた。

そんな期待することを言っていて、からかっているのか？

とは言えずに、更衣室で着替えていた。

しかし、物音ひとつしない…。

やっぱり、帰ったのか…。

リサって、薄情だな。

着替えて、更衣室を出る。

思わず、その気持ちをつぶやいた。

「なんだよーやっぱり、帰ってんじゃ…」

言い切るつとしたその瞬間！

「いるよ、なに言ってるの？」

「えっ…だって、声ひとつ音ひとつとして聞こえなかったし…」

「それは…ケータイいじっていたら、聞こえないでしょ」

少しあっけにとられた。

自分の発言が恥ずかしい。

オレに睨みを利かせて見ているリサ。

「じ、じめえ」

「まあ、いいわ。帰る」

「お、おっ…」

エレベーターに乗りながら、沈黙するふたり。

それを耐えられなかったのか、リサが話かけてきた。

「さっき、マサにメールしたんだ。やっぱり、彼女とデート中だって！

まったく隅に置けないよねえ」

「ま、マジでーっわあ〜ハメられた！」

「どうするっ？」

「謝っても、許せないな！今日のドラマのネタバレしてやる！」

「いい考えね あれ？でも待って…。ワタシ、録画してないかも…」

「そっか。じゃあ、今度貸してあげるよ。DVDだけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫！あっ！間違っても、エッチなの持って来ないよね  
」！

「そんなベタな間違いはしないよ」

「暁やツノキーじゃあるまいし、そんな持っていない。」

「レンタルすることすら苦手なのに。」

「エレベーターを降りる。」

「リサとは方向が逆なので、リサと反対方向を向いて帰ろうとしたら

…。

「ユウ、待って！」

「えっ？」

「女の子をひとりで帰らせるつもり？」

「あっ！そっか、今日は野村先輩居ないんだ。いつもの習慣でそ

のまま帰りそっだった」

「ユウって、気が抜けてるよね。心配りしてものを知らないんだから」

「そこまで言わなくても…。でも…オレでいいの？」

「なに言ってるの？ユウがいいの！」

「ちょーど、どっという意味だよ！」

「だって、今はユウしか居ないじゃん！」

「ああ、そっいうことね」

「それに、ワタシ…ユウのこと…好きだよ！」

「えっ？今、なんて…言ったんだ？」

「女の子にもう一度言わせるつもり？」

「か、勘違いじゃないよね？」

「…うん。あ、あと答えは今すぐじゃなくてもいいからね」

「答えなんて、もう決まってるじゃないか。」

こんなに明るく、人の心を見透かすような瞳で見てくれる。  
そんな彼女を好き以外の答えはない。

「オレも好きだよ。リサのこと」

これまで好きな人に好きとも言えない臆病な自分。

そんなオレに“好き”と言ってくれる。

リサに今までにない愛おしさを感じ、優越感に浸っている自分。  
その反対に不安と戸惑いが心を鷲掴みにして…離さない。

オレがリサにとって、一番好きな人ではないだろうと…。

それでも…今見ている世界が変わるなら、それでも構わない。

「へ？ホント？」

「うん、でも…そんな素振り見せなかった気がするけど…」

「えっ？積極的にアピールしたつもりだったけどなあ…。ユウが鈍感  
なだけじゃない？」

照れくさいふたりの間隔は歩数を重ねるたびに縮まる。

そして互いに手を握り合う。

オレはリサを送り届けることだけに集中しながら。

「野村先輩とリサがいつもシフト一緒っていうのは、暗い夜道を送っ  
てもらったためだったんだよね？」

「そうだよ！スタッフ公認の特別な計らいだね」

「そうだよな、夜道は危険だもんな。こっち方面は初めてだけど。結  
構、暗いな」

リサの家はバイト先からは歩いて10分ほどだけ。

その道は神社やお墓が近くというのもあって、人ひとり居ない寂し  
い道が続く。

これじゃ、ひとりでは帰らせるのは不安だな。

スタッフ公認っていうのは納得。

でも…帰り道のパートナーとして、野村先輩を選んだのは好き  
だったからでもあるような気がするけど。

「そろそろマサの家が見えてくるよー」

野村先輩の家は一軒家。

レンガでキレイに整ったオランダ風な家。



「すごいね。一軒だけ、外国みたいな家だからすごく目立つよ」  
「ユウって、ああいうのが好きなの？」

「そうだね、結構好きだよ。家は一軒家っていうだけで憧れる。実家はマンションだから」

「実家暮らししかあ、いいなあ。ワタシ独り暮らしだから、夜なんて淋しいよ」

「ううん。独り暮らしだよ」

「そうなの？なんだ、一緒じゃん！」

「っていうか、よく女の子の独り暮らし許してくれたな」

「うん、家に居たくなかったから。ウチの親…いつも夫婦ゲンカが絶えなくて…」

そっきまでのリサの表情が暗く沈んでいく。

「やばっ…マズイ話を聞いてしまったなあ。」

「この話は広げてはいけない…そう思い。」

「そ、そっか。ごはんとか、どうしているの？」

「ん？自分で作っているよ。焼きそばとか月見そばとか」

「麺類ばかりじゃん！それは偏りすぎだよ」

「だって、カンタンなんだもん！そういうユウはどうなのよ？」

「オレはちゃんとご飯炊いてるよ。おかずは2種類以上作ってる」

「はは、主婦みたいね」

「健康第一って、言ってくれよな」

「じゃあ。今度、ユウの手料理ごちそうしてよ！」

「おう、腕によりをかけて手料理をもてなしてあげる」

「やったー！」

話題を変えてリサは笑顔に戻った。

それにつられるように自分も笑う。

「気付けば、リサの家に着いた。」

「今日はありがとっね」

「おう」

「家は散らかっているから。今度キレイにした時に、入れてあげる」

「ああ、楽しみにしているよ。じゃあ」

「あっ！ユウ」

「どうした？」

「ケータイ番号交換しないと」

「そっか、してなかったね」

「じゃあ、今赤外線通信しよう。…これで、よし！じゃあね！ユウ」

「おやすみ」

ほくそ笑みながら、大事なりサの番号とメルアドは消えても大丈夫なようにSDカードに保存した。

## 夏祭り

### Chapter 13 “夏祭り”

夏休み。

暁やツノキーは夏の大会に全力を尽くしている頃だろう。

オレは思いつきり、バイトを入れた。

週に4日は入っているかもしれない。

その理由は単にヒマというワケではなく。

来たる8月上旬の生涯初デートに向けて、ガンバっているんだ。

バイトを野村先輩が彼女とデートでサボった翌日。

シフトが野村先輩と一緒にになった。

「おはようございます！野村先輩」

「おはよう、ユウーおや、ご機嫌だねえ！」

「え、そうですか？はは…まあ…。それはさておき、野村先輩！先日バイト替わった時、どこへ行ってたんですか？」

「へっ…いや、言ったじゃないか。生徒会での集まりがあったんだよ」

まだ、シラを切るつもりなのか…こっちはすべて知っている。

「あの日、リサに聞きましたよ。デートだったんですって？」

野村先輩はすぐく、オドオドしながら。

「へっ…いや…その…ナンノコトヤラ？」

「あの日の帰りにバッタリ生徒会の先輩達とも会って、事情は聞いているんですよ。それでもまだ、生徒会の仕事と言い切りますか？ならば、その日のドラマ『夢の中へ堕ちる世界』の最終回知っていますよね？そうそう、あのクライマックスシーンは…」

ドラマのネタバレをしようとしたその時。

「わ、わわわぁー…ごめんな。その日しか、彼女の予定が空いてなくて…まだ、ドラマ観てないんだ！言わないでくれないか…！」

「言わないでくれないか？いやいや…いくら先輩とはいえ、その言葉使いはいかなものかと思えますよ。フフ…！」

「くっ…ドラマの話は勘弁してください。ユウ様  
もう、屈辱の表情を隠せない。」

野村先輩の表情はゲームで負けて、悔しがる小学生のよう。  
「ちょっと気分がいいなあ。」

「まあ、いいでしょう…ただし…」

「もう、いいだろうっ？」

「いえ、まだです。こっちもソフトチェンジしたい日があるので、代わってください」

「はあ、そういうことならよかった。いつがいいの？」

「8月の24日です」

「うん、わかった。溝口スタッフにもちゃんと伝えておくよ」  
「って、ここで小峰とツノキーとの約束はOKになった。」

野村先輩が居なかったおかげで、リサと付き合っつきっかけをもらっ  
たんだ。

そんなに追い詰めてもね。

一応、貸し借りナシってことで。

リサとは付き合っているのはナイショにしながら、バイトをしてい  
る。

まあ、そのうちバレるだろうけど。

付き合っているとはいえ、普段通りの2人にしか見えないだろう  
し。

そんな、バイトに明け暮れている日々。

ある日、ソフトでリサと一緒にになった。

野村先輩も居ないということとで、オレが送ることになった。

「ユウ。どうせ送るなら、家に泊まっていかない？」

デートの前に泊まるというのは、また大胆なことを言うなあ。

「い、いいの？デートもまだしてないんだよっ」

「そっか、ユウは段階を踏むタイプなのね」

そういうワケじゃなくて、リサ自身が積極的すぎるんだよ。

まだ、心の準備もできてないのに…。

「な〜に赤くなってんの？やーね、男はすぐへんな想像ばかりする」

「そりゃ、ちょっと考えちゃうだろう」

「いいわ。じゃあ、デート行こ！そうね、プランはユウに任せる」

「おう、わかった」

「じゃあ、今日は送るだけね」

マジですか！

この時ほど、チャンスを逃したと思ったことはない。

かくしてデートのプランは任されたものの、生涯初デートで女性経験もないオレが見つけたのは“夏祭り”だった。

雑誌にはデートとしては、“初心者にもってこいのイベント”と書いてあった。

その理由はわからないけど、リサにそれを伝えると喜んでくれた。

夏祭り当日。

リサの家近くの祭りが行われる神社で待ち合わせ。

10分ほどはやく着いたけど、まだ来てないみたい…。

「ごめん、待った？」

「いや、そんなことはない」

一瞬、見蕩れてしまった…。

普段は髪をおろしている女性が髪を結ってアップしたら、こんなにも印象が変わるのか。

普通にアップしているだけではなく、巻いてアップというのに大人っぽさを感じる。

さらに藍色の浴衣姿に黄色と緑のふわりとラインの入っているのがまたいい！

「そう、よかった。じゃあ、まずはわたあめ」

子供みたいにはしゃぎながら、オレの手を引っ張るリサの後ろ姿…特に“うなじ”がくつきり見えて実に色っぽい。

子供のような振る舞いとは、正反対の大人の妖艶さ…。

存在自体が反則じゃないか！

わたあめを一緒にたべながら、そんなくだらない視線をリサに送っていた。

「今日、花火があがるんだよ！むっちゃ、楽しみ」

「そうなの？知らなかった」

「まあ、地元だからね！」

「あっ、ワタシのわたあめ持ってて。たこやき買ってくるー！」

「もう違うの食べるの？早くない？」

「さっきできたてのが2個くらいしかなかったから、今買わないと待たされちゃうー！」

「そっか。じゃあ、待ってる」

両手にわたあめを持ちながら、月夜を見上げる。

「よっ、ユウ！お前も来ていたのか？」

月夜を見上げている視線を妨げて、ワツッと野村先輩が入ってきた

「の、野村先輩！あれ？その横に居るのは…」

「おう、紹介するよ。オレの彼女の伊吹奏だ」

「汐風君。こんなところで会うなんて、偶然だね」

「なに、知り合い？」

「そう、同じクラスなんだ！ねっ！」

「うん…っって」

マズインじゃないか？

こんなところをリサが見たら、シヨックで固まるんじゃないか？

それにナイショで付き合っているのに、野村先輩の彼女が同じクラス  
の伊吹さんだなんてオレとしてもマズイ…。

椎名さん経由で暁とかにバレたら、からかわれるのはゴメンだ！

「ここは軽く話を流して離れよう！」

「伊吹さん、大会とかじゃないの？」

「まだ、地区大会だから夜は帰ってくる事ができるんだ。全国大会  
会ってなると、移動でこっやって会えないからね」

「そうなんだ…。じゃあ、これから大変なんだね」

「うんー！」

「じゃあ、一緒にいる友達が待っているんで」

「えっ！もう行くのか？」

「あっ、はい。2人のジャマするのも、悪いんで」

「そっか、気を使わせてしまったみたいで」

「いや、そんなことはないですよ。じゃあ、また」

「汐風君、またね」

どうにか振り切ったものの、肝心のリサを探さないと。

たこやき買っているハズ、だよな…。

いた！

「リサ…ちょっと、お祭りから離れないか？」

「えっ！まだ来たばかりなのに」

「じゃあ、たこやきを食べながらでもいいから。ちょっと、奥に行こう」

「ちょ、ちょっと、わたあめ持った手で押さないで！ついちゃうじゃないー！」

そんなことに構っていられるか！

この楽しんでいる時間が壊れてしまうのは、絶対避けたい！

「ふう…ここまで来たら、もう大丈夫だ」

「神社の中まで入って来て、おみくじでも引くの？」

「まあ、そんなとこ」

「あれ〜なんか隠してる〜！なにかあったの？」

また、人の心を読むのが巧みすぎ！

「それは言えない…。少しここでゆっくりしてよう。欲しいモノがあったら、買ってくるから」

「ふうん、まあいいわ」

ふたりで買った食べ物食べて、少し落ち着いた時に。

「…ちょっと待ってて、トイレ行ってくる」

リサは颯爽と走って行った。

相当ピンチだったのだろう。

とりあえずここに居れば、大丈夫だ、

10分経っても、帰って来ない…どうしたんだろう。

気になって、ケータイを鳴らしてみる。

着信音が近い！思わず、発信を切った。

そつと、神社の壁から様子を窺う。

「へえ、そつなんだ」

リサの声が聞こえる方向を見ると…。

「仲良さそつで、よかった。マサは結構頼りない時もあるから、

そんな時はガツンとやっちゃっていいから」

「はは、リサさんって面白いね。色々知っているんだマサのこと」

「リサ、あんま余計なこと言つなよ。これからやりづらくなるじゃないか」

「はは、ごめん。つい、口から出ちゃった」

ああ…野村先輩達と会ってしまったのか…。

「じゃあ、ジャマしちゃ悪いし、ワタシはこれで。友達も待ってるし」

「そつか。そついえばさつき、ユウが居たよ。もしかして、友達ってユウのことか？」

「へっ！ああ…違う、違う。普通に友達と会う約束してるんだ」

「ふくん。じゃあ、またな！」

「リサさん。また会いましょう」

「うん！またね」

ふたりは人ごみの中へ消えていった。

見送った手と共に固まったりサ。

後ろから声をかけてみる。

「見ちゃったか…」

「うん…かわいかった…彼女」

見送った方向をずっと見ながら、話すリサ。

その背中は、お祭りに来た時とまったく違っていた。

今のリサの表情が手に取るようにわかる。

だから、そのまま後ろから続けて話しかけた。

「そつか…さつきオレも会ったんだ」

「そつ、なんだ…。だから…ユウはやさしいね」

「楽しんでるリサにはふたりがいることを言えなかった…。ごめん  
な」

「うづん。どっちにしても…ここにいたら、会っていたよ」



振り向くりサの顔はもう…泣きじゃくっていた。

そのまま抱きしめる…。

強く抱きしめる。

「まだ、会うまでは信じてなかったんだ…。でも…もう目の当たりにしちゃつとね…」

「うん…わかった…もういい」

「ユウは知っていたの？ワタシがマサのこと好きだったこと…」

「それでもリサが好きだったことに、変わりはないよ」

「ありがとう」

楽しみにしていたハズの花火が上がる。

花火の音が、寂しく聞こえる。

その音が体の芯を揺さぶって、落ち着かない…。

失恋って、こんなにも気持ち悪くさせるものなのか。

遠くから好きな人をずっと見て何も行動を起こさない自分とは、リ

サは違う。

リサはすぐ傍で一緒にバイトして、一緒に帰ってそのままの関係で  
もいい…。

相手が恋愛対象として見ていなくても、傍にいれたらそれでいい。

それを選んだリサは傷つくの恐れて。

関係も壊したくなくて、告白しなかったそうだ。

でも…その反動はすごく大きい…。

今ではもうどうしようもない話を延々としながら…リサを家に  
送った。

## 暁の思惑

### Chapter 10 “暁の思惑”

「お疲れ様ー！じゃあテスト用紙を後ろから持ってきて」  
期末試験が終わってしまった。

汐凧君に声をかけられずに、「このまま夏を迎えてしまうのかな。

「結華、試験どうだった？」

「うん…まあまあかな、奏はどうだった？」

「完璧だよ…結華なんか元氣ないね？また汐凧君のこと？」  
奏は相変わらずの鋭さだわ。

もしかして、表情に出てるのかな？

「い、いや…そんなことないよ」

しどろもどろになってしまった。

「そう。悩んでいることがあるなら、言ってね！」

「うん、わかった」

ふう…また問い詰められたら、吐露してしまいそうだ。

「ちょっとトイレ行ってくるね」

「このまま夏を迎えると、大会のスケジュール的に顔を合わせるチャンスがなくなってしまう。」

由美ネエにせっかくアドバイスしてもらったのに、ワタシの意気地なし…。

「椎名、ちょっといいか？」

振り返ると、小峰がいた。

「なに？またテストの点数でバカにしようとか思っているの？ざんねん、今回はいいデキ…」

「違うんだ。教室じゃなんだから、屋上で話さないか？」

あれ？すぐく、真剣な話っばい。

「暑いから早めにお願いな」

「そうだな、お前次第だけど…」

トイレに行く間待ってもらって、ふたりにて屋上へ向かった。

その間の周囲の桃色の視線を感じながら。

でも残念、お互いそんな間柄じゃないんだなあ。

屋上は誰も居なかった。

少し日射しが雲にジャマされて、過ごしやすい感じ。

「椎名、お前って…裕司が好きなんだろっ」

大きな雲の影に覆われながら、小峰は言う。

まったく想像もしていなかった発言にかなり驚いて、すぐに返事をすることができなかった。

大きな雲が流れる。

日射しがキラッと射した頃にやっと、返事ができる状態になった。

「小峰…なんで知っているの？」

「そっか、ウワサはホントだったんだな」

「ちょっと、ウワサって…今の学校では奏くらいにしか汐風君が好きって言ってないのに、みんなに知られているの…」

「違う、そっいうのじゃない」

「なっ…それじゃあ、ウワサってなによっ」

少し小峰はうつむいて、一息ついて言う。

「ウワサっていうのは、椎名が、好きな人を見つめるとその相手が…倒れる”っていう話だよ」

そっか…それで気付いたんだ。

でも、小峰はそれをウワサだと思ってくれていた。

ワタシは小峰に恋愛感情がなかったし、部活も別だったから現場を目撃することもなかった。

でも、あの体育の授業中は小峰もいた…。

だから、ウワサが確信へと変わった。

それでも信じられなくて、ワタシに確認しにきたんだ。

聞くのには勇気があるものね。

「そっ…だったら、どうだって言うの？」

「裕司にはもっ伝えたのか？」

「い、言えるワケないじゃない…」告白っていうのは男の子に言って

もらつのが普通でしょー！」

違う、ただワタシは言う勇気がないだけ。

そんなこと小峰に言ったところで、変わるワケないじゃない。

「そんな、受ける側になるとか、お前の性格からは想像もできない発言だな」

「悪かったわね。その程度なのよ」

「ふむ、仕方ない。幼馴染みのクサレ縁ってことで、ひと肌脱いでやるかー！」

「なに、人の恋路をジャマするつもり？」

「そうじゃねえよ。デートのセッティングしてやるって、言ってるのー！」

「えっ？でも…ふたりきりなんて、いきなりとか…そんなのムリだし」  
「それはさっきまでの椎名の言動でよくわかった。デートっていうのは2種類あるんだよ。ひとつは一般的なふたりきりのデート。もうひとつはそう、グループでデートだー！」

意外と頭の回転がいいのね暁って。

「そっか。それなら問題ないね」

「男は裕司とオレ、それにツノキーで。そっちは3人で頼むなー！」

「こっちは奏とワタシ。もうひとり是谁か誘ってみる。でも、この組み合わせはおかしくない？どんな繋がりなの？」

「んー？同じクラスって、ことでいいんじゃない？」

「奏…どう思うかなあ。それにもうひよりは同じクラス限定になるのかあ。難易度が一気に上がった感じ」

「それにいつにかかっていうのが、大事だな。もし、全国大会って考えると8月後半かな？まあ、それはまた決まってからで。じゃあ、そっちはよろしくなー！」

「あっーちよっつー！」

昔からワタシを放置して、ぶらっと消えるのが暁はつまい。

とりあえず、奏はなんとしても連れていこっつー！

「奏」

「なあこっつー！」

「もし、バスケット部が全国大会まで行ったとして。そのあとの休みって、いつが空いてる？」

「うーん、そうだなあ」

奏は手帳を出して確認している。

結構、悩んでいる様子。

「8月は全国大会決勝が22日だから、そのあとだと…。24日の水曜日くらいかな？」

「そんな夏にスケジュールいっぱい、いっぱいかい！」

「夏休みと言っても、かなりの量の宿題があるし」

「そっか。宿題は適当に大会前にやってしまおうと思ってたから、気にしてなかったわ」

「ホント？それならスケジュールが一気に空く！」

『それなら』って、どついう意味？

「えっと、結華に宿題見せてもらえるなら！宿題に追われることもないって、意味だけど？」

「それはダメ！じゃあ、24日ね」

「ええ〜！ケチ！」

「自分のことは自分でやりなさい！それに宿題の答えが一緒だったら、あからさまに疑われるでしょ？」

「じゅ〜」

グウの音も出ないみたい。

「それで24日どこに行くの？」

「えっ…っ…っ…」

そういえば、まだどこに行くとも小峰とは話してないや。

それに内容をここで言っても、変に疑われるだけだから「」は…。

「ナイシヨ」

「あやしい…普段使わない言葉を結華が使っなんて。すごくあやしい…」

言わなくても、疑われた！

奏がすごい目で見てくる…。

もう呪じつてこじくらの目で…！

「ま、まあたまにはナイショっていうのも、アリってことで」「まいつか！全国大会決勝まで行けるといいね」

なんとか、誤魔化せたみたい。

24日になったけど、あっちは空いてるのかな？

もうひとり見つける前にメールしてみよ。

(おっ！椎名からメールだ。)

『奏は行けるって！あとひとりはまだ見つからないけど、8月の24日で大丈夫？あともひとつ質問！どこに行くのか、決めた？』

24日か、よし！オレもその頃には大会が終わる。

裕司とツノキーに声をかけよう。

ん？行く場所？夏なら決まってるだろ(

「なあ、暁。前に保健室で言いかけたことって、なに？」

「ああ、あれはなあ……」

(まだ、裕司には黙っておこう)

「いや、それより8月の24日って空いてる？」

「8月？まだ予定すら、決まってるないよ」

「じゃあ、空けておいて！海行こうぜ！」

「なにになに〜海でナンパか？」

「おう、ツノキーもどうだ？24日」

「確かにいいなあ〜ナンパ！オレも行く！」

「じゃあ、そうしよう！8月24日ちゃんと空けとけよ」

「オレはナンパとかはいいよ」

「裕司、そんな寂しいこと言つなよ！せっかくの夏休みを満喫しないでどうするよ！ただ、海で遊ぶだけでも気分は違うぜ！」

(それに裕司が来ないと、何もはじまらないからな)

「そうか？じゃあ、遊ぶだけならいいよ」

「はは〜ん？居るんだよね〜こっぴつヤツ…。シオっちって、もしかしてムッツリスケベなのか？」

「なに言ってるんだよ！そんなことないって」

「だってさあ。こっぴつやる気のない素振りを見せているヤツに限って、現場に行けば豹変するもんな」

「ちょ、それはないよ！それに今はかの…ハッ！なんでもない。と、とにかく普通に海で遊ぼうな」

「まあ行つてのお楽しみだな！」

「えっー！」

周りがビククリするほど、大声をだしてしまった。

小峰が送ってきたメールにはこう書いてあった。

『24日か、わかった。夏に行くところなんて決まってるんだろ。

海だよ！』

小峰はなんで海なんかチョイスしたの？

あっ！もうあの状況だと、ふたりには言っちゃったみたいだし。

胸が大きいワタシを笑いモノにする気なの？

もう！ここは胸パット盛って行くしかない！

「どうしたの？結華？」

「ん？ああ…奏、24日は水着持ってきてね」

「もしかして！海！海なの？ああ…どうしよう！それならワタシ新しい水着買っちゃおっかなあ。ねえ、結華！今度水着買いに行こうよ！」

「まったく、胸に悩む必要がない娘はいいわね」

「そんなことないよ。胸が大きいと、肩が凝って大変なんだから」

「羨ましい悩みだこと！」

たゆん たゆん っと、豊満な胸を揺らしながらこの娘は何を言っているんだか…。はあ…一気に成長したりしないかなあ…。

## 夏休みを満喫

### Chapter 11 “夏休みを満喫”

7月のはじめ。

夏真っ盛りという感じの暑さ。

ある日、ツノキーから電話がかかってきた。

「シオっち、今度の日曜日ヒマかい？」

「うん、ちょうど休みだよ」

「ラウンドワンで遊ばないか？」

「面白そうだね。じゃあ、暁も誘わないか？」

「もうすでに、暁には連絡してあるんだ。じゃあ、朝10時にラウンドワンで待ち合わせな！楽しみだな」

「ああ、楽しみにしているよー！」

そっけなく。

オレは少し早めにラウンドワンの前に着いた。

「おはよー、裕司ー！」

「おはよー。そっいえば、ラグビー部の大会って始まってるよね？」

「今、県ベスト4まで来てるぜー！」

「すごいな！さすが県屈指の強豪だけはあるな！」

「その肩書きは今大会で、返上するぜー！」

「ん？そんなマズイ状況なの？」

「いやいや、その逆だよ！オレ達ラグビー部は全国も狙えるくらい強

いー！」

「ホントか！楽しみにしているよー！」

「おう、どんと期待してくれー！」

ものスゴイ気合いの入りようだな。

「ふう〜！」

「はーっっっ！」



暁と大会の話で盛り上がっていたその時。

オレの敏感な耳元に息を吹きかけてくる人物がいた。

「よっしゃー!」

歓喜をあげる男が、オレの背後にいる…。

ツノキーだ。

「つ、ツノキー…。なんてことを…」

「想像以上の反応だなあ」

ツノキーは満足気に両手を腰にあてている。

「裕司…お前って、耳敏感だったのか?」

暁は突然のことでビックリしていたが、心配そうに話しかけてくれた。

「うん…ダメなんだ。耳がゾクゾクつとする」

「シオっち、その表情…たまらないなあ!」

ツノキーの表情は楽しそうだったが、こっちは全然楽しくない!

「ツノキー! なんのつもりなんだ?」

「ただの朝の挨拶だよ。そんな怒るなって」

「この仕返しはラウンドワンで返す!」

「おう! ハードル走の決着もまだついてなかったな!」

「よし、その決着もここで! つけるよ!」

「ノリ気だねえ、ハッ!」

ふたりの闘志は熱く燃え上がる!

「お、おい…そんな熱くなるなよ! なっ、今日は楽しもうぜ!」

「なんか言った?」

「なんか言った?」

ふたりに声を合わせて、睨みつける!

「いや、普通に遊ぼうぜ…」

今にも飛びかかりそうな熱視線で、暁を睨みつけるオレとツノキー。

「わ、わかった。わかったって!」

「よし! わかればいいんだ!」

「楽しみだな、シオっち!」

「はあく。せっかく、部活が休みだっていうのに。とんだ巻き添えを……」  
暁は少し意気消沈しているみたいだが、オレ達は気付かない。  
オレとツノキー熱気は、周囲のお客さんをも寄せ付けられないほどだった。

受付のお姉さんも例外ではない。

遠くからこっちを見て、ドン引きしている。

そんなのはお構いなしに、受付に行く。

「あ、あのどちらで遊びますか？」

『スッポンポン』で、お願いしますー！」

「は…はい？お客様、どちらで遊びますか？」

お姉さんはもう一度聞き直してきた。

「だから、スッポンポンでお願いします？」

「お、お客様。私に何を求めているのですか？」

「だーかーらー！スッポンポンですって！」

それを見ていた周囲のお客さんからクスッと、笑いが起きはじめた。

「当店は、そのようなサービスは承っておりませんが…」

「えっ？だって、ここに書いてありますよー！」

ムキになって、受付にあるメニューを指差して伝えた。

「ぎゃっはっはっはっはー！シオっち最高ー！」

「ゆ、裕司マジで言ってるのか？ヒヤハハハハ！」

横にいたツノキーと暁がなぜか、爆笑している…。

さっきまで熱気に気負っていた周囲のお客さんも笑いはじめて、受付は爆笑の渦と化した。

オレは真剣な顔で言っているのに、まだ気付かない。

受付のお姉さんは状況が飲み込めなかった様子で、落ち着いて案内してくれた。

「お客様がご希望のプランは『スポッチャ』ですね…ぷふっ！」

なぜか、お姉さんまで笑っている。

だって、ここにスポッ…チャ…。

オレは間違えて、言っていた。

「あっ…す、すいませんー！」

熱くなっていて、まったく気付かなかった…。

それにいつもテレビのCMを観て、いつか行こうとワクワクしていたし。

ラウンドワンに来ること自体初めてだったのもある。

それも手伝って、一気に恥ずかしくなり数秒…(体内時計では数分)固まるオレ…。

「裕司、あとはオレがやるから、ツノキーと一緒に待っていてくれ」  
笑いがおさまって、冷静になった暁が受付で応対してくれた。

オレは周囲の視線を避けるようにツノキーの元へと行く。

「はあ〜。もう帰りたい…」

「まあ、そんな気を落とすなって。誰にでも間違いはあるんだから」

ツノキーは慰めてくれたが、その表情は完全に笑いを堪えている。

気を落とした状態で、ツノキーとの勝負に勝てるのだろうか。

リサにはこの事は伝えないでおこう。

変態扱いされて、KFCでは笑いモノにされるだろうし。

暁とツノキーは固まるオレを引きずって、エレベーターへと乗り込む。

「シオっちーって、おい…」

「帰りたい…帰りたい…」

ツノキーの呼び声も遠くに聴こえるほど、独り言を連発していた。

「しょうがないなあ〜こっぴなったら、ヒヒッ…」

それはもうないだろうと、内心ほっとしていた。

その油断が甘かった。

「ふう〜」

「は、はっひっひっ…」

ツノキーはまたもや、オレの耳元に息を吹きかけてきた。

「っ、ツノキー！やめてくれて、言っただろー！」

「おっ！元のシオっちに戻った。お帰り」

「はっ…た、ただいま」

迂闊にもツノキーのノリにのってしまった！

「ツノキー、あんまりやり過ぎると効果なくなるぞ」

「そっちの心配じゃなくて、オレの心配をしてくれよ暁」

「ん？そっか？おっ、着いたぜ！」

まずは屋内で遊ぶことになった。

フロアの休憩所に3人で座る。

「じゃあ、オレが審判をやるぞ。コイントスで先攻と後攻を決める！」

「暁。ラグビーじゃないんだから…ジャンケンにしない？」

「ジャンケンだと、あとだしとか後々面倒だから。なっ、いいだろ？」

「まあ、それは確かに一理ある。しかし本格的だなあ…」

啞然とするオレの横でひょいっと、1000円玉をひっくり返す暁。

「1000円と書いてある方がウラで、桜の模様がかいてあるのがオモテ。さあ、どっちにする？」

「詳しいなあ。普通に1000円の方がオモテだと思ってたよ。その知識を勉強に生かせたら、赤点ギリギリなんて彷徨ないで済むのに…」

「裕司、知識と勉強はまったくの別物だ」

「そっなのか？」

「じゃあ、オレはウラで」

暁の豆知識に感心している間に、ツノキーはウラを選んだ。

「いま気付いたけど。コイントスって、先に言ったもん勝ちのような気がするけど…」

「そんなことはないさ。オモテもウラも先攻と後攻って、決めてないからな」

「そっだぞ、シオっち！まだ決まったワケじゃない」

「そっか」

なんか、丸めこまれている気がする。

オレは自動的にオモテの桜の模様となった。

「さて、ここで出た方が先攻だ。おっ？1000円の絵柄だから、ツノキーが先攻だな」

「先攻か、先手必勝ってヤツだな！」

「じゃあ、ツノキー。どの競技にするか、決めてくれ」

「スポーツチャは32種類もある。」

「ツノキーが選ぶとしたら、部活でもやっている卓球かな？」

「ダーツだー！」

「なるほど、ダーツか！よしー！」

「意外なチョイスだったなあ。」

「待てよ、ちょっと暁に確認しないといけないことがある。」

「暁、今日どのくらいの種類で勝負するの？」

「一応3時間パックだから、まあ大体5種類くらいだな。オレも当初

は遊びにきたわけだし、残った時間は一緒に遊ぼうぜ！」

「なるほど、わかった」

「えっ？3時間ぶつ通しで勝負じゃないのか？」

「ツノキー。そんなんじゃないあ、夏の大会でへバっちまうぞ！」

「それが…卓球部は…」

「さっきまでのツノキーのパワフルな勢いがなくなった。」

「卓球部でなにかあったのかも…。」

「実は今日、試合の予定だったんだ…」

「えっ？じゃあ、ツノキーここに居ちゃマズインじゃないか？」

「そうじゃないんだ…」

「かなり深刻そうだから、これ以上は何も聞かないでおこう。」

「ま、まあ。とりあえず、今を楽しもう！」

「気落ちするなら、それを持ち上げるだけだ。」

「今日はツノキーをおおいに盛り上げるしかないな！」

「じゃ、じゃあ！勝負といこう、ツノキー！なあ、暁！」

「おうーさあ、遊ぼうぜー！」

「暁も場の空気を読んで、盛り上げてくれた。」

「お、お前から…よっしゃー！まずダーツで勝負だ。シオっち！」

「おーー！」

「いい意味でテンションが上がってきた。」

「3人でダーツのある場所へと向かう。」

「ダーツにはルールがいっぱいあるので、正直言つと分からない。」

「ツノキーが選んだというのは、得意としている可能性が高い。」

完全に不利な状況だ。

「ダーツって、矢を投げて遊ぶっていうのはわかるんだけど。詳しいルールをよく知らないんだ。ツノキー、教えてくれないか？」

「な〜んだ、シオっちもか！ははっ、実はオレも知らない」

「えっ〜！」

「えっ〜！」

暁とオレは同時に大声で驚愕。

「っ、ツノキー？なんで、ダーツ選んだの？」

「なんで…って。最近テレビでよく見かけるからさ。一度やってみたかったんだよ！ダーツって、響きだけでカッコイイじゃん！」

「確かにダーツバーとか、ダーツのプロとか見かけるけどさ。ルールわからないんじゃないよあ、やろうにもできないよ」

「そんなことはないよ。ほら、ダーツってというのはゲームの本体みたくいになっているから」

そう言われて、ダーツのマシンに近づいてみる。

ボタンを押すだけで、ルールや競技の種類などが出てくる。

これは初心者でも便利な設定だ。

マシンを見るだけで、早くプレイしたくなってくる！

「これが、デジタルな時代なのか！スゴいな！」

オレは子供のように目をキラキラさせて、マシンを見ていた。するとツノキーが近寄って、ヒソヒソと話しかけてきた。

「おいおい、シオっち。あんまり騒がない方がいいぜ。初心者だって、バレルぞ！いいかい？ここはさもやっているフリをするんだ」

「そ、そうだね。サンキュー、ツノキー」

心躍る自分をなだめながら、いざ勝負！

「マシンが計算してくれるから、オレも参加するけどいいか？」

暁は審判をせず、普通に楽しみたいようだ。

「もちろん！一緒にやるっ！」

最初にプレイしたのは、『COUNTER UP(カウントアップ)』というもの。

前もって、決めたスコアに最初に到達したプレイヤーが勝ち。

ポイントが高いほど、勝つ可能性が高い。  
ダーツの中で一番知られている競技でもある。

スコアは400に設定したので、そこに到達した時点で勝ち。  
「じゃあ、オレからいくぞー」

ツノキーの第一投はド真ん中に入った！

“BULL”とダーツ盤の上の画面で点滅する。

そのあとに25点と表示された。

「ツノキー！スゴイじゃん！」

「いや、たまたまだよー」

うれしさを隠しながら、クールに流すツノキーはなぜかかっこよ  
かった。

「同じところに2本を連続で当てれば、さらに加点されるハズ！」

ノリにのったツノキーの気持ちはむなしく、2本とも的の外へと飛  
んでいく。

ド真ん中に当たったのは、ホントにたまたまだったようだ。

「ま、まあ。次で決めれば、OKだし。気にしない、気にしない」

自分で自分を励ますツノキー。

「ドンマイー！じゃあ、次はオレだねー」

オレはまず、横でプレイする人のやり方を観察した。

ラインの向きに足を合わせて、持ち方は90°くらいの角度。

そのままの形でスッと投げる。

第一投はうまく刺さったけど、結果は2点。

あまりに力を入れなかったせいで、斜めに刺さった。

今度は少し力を入れて第二投！

刺さった場所は少し上の20点だったが、なぜか60点になった。

「裕司やるなあー」

「やるじゃん！シオっちー」

ふたりは褒めてくれているが、こっちはまったく状況がつかめな  
い。

「刺さったのは20点なのに、表示されるのは60点なの？」

「裕司、それはな。あの中心から少し離れている狭いところに刺さっ

たからなんだよ。そこは20の3倍の得点が入るんだ」

「シオっち、実はやったことあるんじゃないのか？」

「そんなことないよ。周りの人のマネして、投げてるだけ。でもこうやって、刺されるとダーツって面白い！」

「だろっ！」

ツノキーは少し、鼻高々といった感じ。

しかし、第三投は的外した。

十数分後。

「やったー！勝った！」

オレが勝利！

「シオっち、おめでとー！」

「うん！ありがと！でも……」

「そうだな…素直に喜べないよな……」

ふたたびラウンド12までもつれた接戦をよそに、暁は6ラウンドでスコア400軽々と達成した。

「おーい、ジューズ買ってきたぞ！おっ！裕司が勝ったのか、やったな！」

あまりにも早く達成したため、飲み物を買ってきてくれた暁。

「なんで、そんなに上手いの？ありえないでしょ！暁も初心者じゃないの？」

少し黙りこんで、暁は口を開く。

「実はさ。小さい頃から商店街のダーツ大会で毎回優勝してるんだ！」

「えっ！なんでそれを早く言わなかったんだよ？」

「だって、自慢みたいになるから……」

「そんなことない！暁が教えてくれたら、もっと早く決着したはずなのに！なあ、ツノキー……」

「そうだよ！暁、早く教えてくれよな！」

「わりい、わりい。じゃあ、教えるよ！」

暁に手とり足とり教えてもらったが、ツノキーの飲み込みの早さに



は勝てなかった。

「よっしゃー!」

結局、トータル2勝1敗でツノキーが勝った。

「負けたのは悔しいけど、かなり面白かった!」

「また今度やるうな!」

「おー!次回は負けないよ!」

ダーツは意外と時間が経つゲームだった。

「時間が経つのが、早いなあ。あと1時間半だ。じゃあ、次は裕司が決めてくれ」

「それだったら、ポケバイで勝負だ!」

「ポケバイってなに?」

「ポケットバイクの略称でバイクのちっちゃいのだよ」

「へえ〜。そんなのが、ラウンドワンにあるのか?」

「うん。さっき、やってる人見つけたよ。ほら!」

オレが指差す方向には、確かにリンクはあるが…。

「裕司、あそこはローラースケート専用のリンクじゃないか?」

「さっきのダーツできっと、神経疲れてるんだよ。だから、リンクでバイクが走ってるように見えただよ!」

ふたりの言う通りリンクではローラースケート場のようだ。

「い、いやでも来た時には走ってたし、それに音もしていたんだ」

説明しても、不思議がるふたり…まるで信じていない。

「ちょっと待って!店員さんに聞いてみるから!」

ふたりにそう伝えたあと遠くに見えた店員に聞いてみる。

「あの…ポケバイって、ありますよね!」

「はい、ございます」

「そうですか!」

よかった、やっぱりあったんだ!

「ポケバイはどこで乗るんですか?」

店員はローラースケートのリンクを指差して。

「今、ローラースケートしているリンクで行います。1回につき6名様まで走行可能ですよ」

事故防止のためか、少人数で走行するらしい。

「スタート時間は何時ですか？」

「さきほど、ポケバイをご使用になるお客様が見えましたので。あと10分後くらいにスタートしますよ。ポケバイは90分に一度なので、この機会にどうぞ！」

待てよ、10分後って…あんまり時間ないじゃん！

「ありがとうございます！」

一礼をして、急いでふたりの元へ戻る。

「やっぱ、あったよ！ポケバイやるっ！」

「ホントか！オレも乗りたい！」

「よし、勝負しよう。シオっち！」

ふたりを連れて、リンクへと向かう。

ローラースケートをしていたお客さんがリンクから出ていく。

ポケバイに乗るお客さんが3人見える。

「やばい！早く行こう！」

「なんでそんなに急ぐんだ？裕司」

「ポケバイに乗る人が3人見えたから、急いでるんだ。1回に6人までだって。このチャンス逃すと、結構待たされるって！」

「マジか！そりゃ早く行かないとな！」

そう伝えた瞬間、暁はビュン！と走って行った。

さすがに足が速い！

ラグビー部のウイングってことだけはあはる。

さきに着いた暁はもうすでに準備していた。

「ふたり共イントリーしておいたから。早く準備して、もうすぐはじまるぞ！」

ポケバイに乗るにはプロテクターにバイク用のグローブとゼッケンを用意された。結構本格的だった。

さっそく、装着する。

「壁際1mは接近してはいけません。また、走行する相手との車間は2mは空けてください！」

ポケバイ専属の店員から説明を受けて、借りたバイクを引いてリン

クへ。

レースは3周勝負、元はローラースケートのリンクなので、ちょっと路面がツルツルしている気がする。

「よし、いざ勝負だー!」

「ツノキー、ここは負けるわけにはいかないよー!」

「強気だねえー!」

ここで負けたら、時間的に勝てる可能性がなくなる。

「はい、ではみなさんルールを守ってくださいねーいざ、スタート!」

ハンドルを切ると、体が持っていかれる。

はじめての運転なので、最初は戸惑った。

が、徐々に慣れてきて前方を見る。

目の前にはツノキーがいた!

ハンドルを回して、アクセルをかける。

「ツノキーお先に〜!」

「あつ、待てー!シオっちー!」

ツノキーが追いかけてくるものの、ポケバイの調子が悪いのか思ったよりもスピードが出ないらしい。

後方を軽く見てみた。

エンジンのかかりが悪いのか、曉はちょっと遅れている。

コーナーでレーサーみたいに、体を斜めに見ようと思ったが。

先に行く他の人がそれをやって、転倒しかけているのを見て思いとどまった。

ポケバイのレース中は疾走感のある曲が流れた。

今日流れていたのは、Queenの『I Was Born To

Love You』だった。

「裕司、ラスト一周で勝負だ!」

「いつのまに来たんだ!早いなあ!」

背後から曉が追い上げてきた。

ギリギリ6人中2位でゴール!

3周はあつという間に終了したが、かなり楽しい!

もう一度とも思ったが、他のお客さんが待っていてそれは叶わな

かった。

リンクにバイクを置いて、借りた物はすべて店員に渡す。

「惜しかったなあ。裕司にもう少して届きそうだったのに！」

「ものスゴイ追い上げだったね、晧。結構後方に見えたから、油断していたよ」

「エンジンがかかってから、スピードを緩めないように乗ってたんだ。

そしたら、目の前に裕司が見えた。一瞬、勝てると夢を見たね！」

晧も興奮を抑えきれない様子。

「いいよなあ。ふたりはデッドヒートできて…。オレなんか…まったくスピードが出なかったよ」

ポケバイの結果を楽しく話しているふたりの背後に、元氣のない声が聞こえる。

「あ、あははっ。まあ仕方ないよ、ツノキー。マシンの性能の差はあるよ」

「そっか。それなら、仕方ないか！」

「これでツノキーと裕司は1勝1敗で引き分けだから、時間的にも次が最終決戦だな。じゃあ、次はツノキーが種目を決める番だ！」

「よし、勝負としては面白くなってきた！」

「気を取り直すツノキー。」

「じゃあ、卓球で！」

まさかのチョイスだった。

「えっ！本気で勝ちに来てるじゃん！」

「そっだよ。負けられないからな！」

容赦ないツノキーだった…ありえない。

「それはいくらなんでも、やる前から勝負は決まったようなもんだろ

！ツノキー」

オレのフォローに来てくれた晧。

「やってみなきゃ、わからないよあ？（ニヤッ）（ニヤッ）」

今めっちゃ、ニヤッって笑った！

「ツノキーは確信犯だよ！晧！なんか言ってる！」

「いや、ルールは時に残酷だから…。裕司、この条件は飲むしかな

「い」

「えっー！」

さっきまでのフォローはどうしたのさー！

何かを賭けているわけでもないのに、盛り上がっている。

そんな時にツノキーのケータイが鳴った。

「はい、宮間先生。どうも暑中お見舞いもうし上げ？…って、それどころじゃない？はい、はい…ええっ　！はい…分かりました」

ツノキーは電話に出たあと、深刻そうな顔をしている。

「どうしたの？ツノキーなんか顔色悪いよ？」

「ああ…実はな、今日補習サボってきちゃったんだ。それが今宮間先生にバレて、補習期間延長だと言われた。はあ…ついてないよ」

「ん？補習？ツノキー補習だったの？じゃあ、卓球部は？」

「卓球部は今日無事に県ベスト4に入ったって、さっき連絡が来た。補習のヤツが大会に出られるほど、卓球部は甘くはないよ」

心配をして損した。

卓球部が予選敗退とか、不祥事があって大会に出られないと思い。

まったく、いらぬ心配ばかりしていたオレ。

そんなことでツノキーが落ち込んでいたのかと思うと、だんだん腹がたってきた。

「ツノキー！今すぐ学校に行って、先生に謝っておいで！」

「えっーそんなことしたって、大会に出られるワケじゃないし…。それに補習だって…」

「四の五の言わずに、まずは謝ってきなさい！」

「わかったよ。じゃあ、この勝負はお預けだ！じゃあな。暁、シオっち」

「手を振るヒマがあったら、早く行きなよ…もう」

暁はただただ苦笑いだった。

「裕司、怒りとツッコミって、意外と近いものがあるんだな」

「そうか？あんまり関係ないとも思うけど。じゃあ、ここからはふたりで遊ぼっな」

「お、おっー！」

残り時間はやりたい放題に遊んだ。

ガンシューティングやビリヤード、バッティングセンターなどなど。

多種多様に遊んで、暁と楽しんだ。

「じゃあね、また24日に会おう。暁！」

「おう、遅れるなよ！」

(あっ…裕司に椎名の話をするの忘れた。まあいつか、海で伝えればいいんだし)

そのまま帰っていく暁の背を見ながら、はじめて夏休みらしい夏休みを満喫した気分だった。

## 夏休みの宿題

### Chapter 12 “夏休みの宿題”

「結華」。宿題見せてくれないんなら、一緒にやろう！」

「はあ……わかった、わかった」

「やったー！」

「でも、絶対に写したりしちゃダメだよ」

「はいはい、わかりましたー」

結局、奏と夏休みの宿題をすることになった。

ワタシより勉強できるクセに、それも頼んで来たのは奏なのに奏の家でやるなんてありえない！

今日は「こんなに暑いのに……はあ……」。

「こんにちはー！」

「あつ、結華ねえちゃんだ！」

「おう、凜太郎。久しぶりだね！」

お出迎えしてくれたのは奏の弟の凜太郎小学6年生だ。

「今日は何のよう？ねえちゃんならまだ寝てるよ」

くっ……一緒に宿題しようって、言っておいて。

それも日付も奏が指定したのに、まだ寝てるってかい！

「結華……ねえちゃん？」

「凜太郎！奏を起こすのちょっと手伝ってくれない？」

「うん、まかせて！ねえちゃん起こすのは毎日の日課なんだ！」

凜太郎と一緒に奏の部屋に行く。

「うーん、先輩どこに行きましょつか？」

なんの夢を見ているのかさっぱりだけど、冷房の利いた部屋で吞気に寝てることでワタシはさらに腹がたった。

「よし、凜太郎！顔に落書きしちゃえー！」

「えー！それってバレたらオレが怒られちゃうじゃんー！」

「大丈夫。バレたら、ワタシのせいにするばいいのよ」

「うーん。じゃあ、わかった！でもホントにホントだよ」

「はいはい、大丈夫だから」

奏の顔に机にあった黒のマッキを手に持つ凜太郎。

日頃の鬱憤がたまっていたのか、顔を真っ黒に塗りつぶしはじめ  
る。

それを見たワタシは、途中から笑いが耐えられなくなった。

今の段階で起こしてはマズイと思って、部屋を飛び出す。

「ふう〜。よし！結華ねえちゃん！もついいよー」

奏のその姿はイカスミを顔面に塗りたくった感じになっていた。

「ねえちゃん起きたらビックリするだろうね。ヒヒー！」

「顔を洗いにいくまでは大丈夫だよ！じゃあ、おねえちゃんが仕上げ  
に……」

ワタシは白いペンを手にとって、まつ毛と口のまわりを丸く囲んで  
みた。

「くっ…はははっ！結華ねえちゃんやるね！これは傑作だ！キャハハ  
ハ！」

凜太郎が爆笑した声が部屋中に響き渡る。

ワタシも笑いをこらえるのが、限界だった。

ふたり共、たまらず爆笑。

「うーん…おはよー。あれ？なんで、結華がいるの？」

さすがの奏も起きちゃった。

「ね、ねえちゃん…ぷくくくっ！おはよー！ぷっ」

「凜太郎ダメだって…そ、そんな笑っちゃあ…あははは」

「うーん…あれ？何で笑ってるの？」

「えっ！いや、なんでもー。ねえ、凜太郎」

「うん！なんでもないよ」

「へんなの？ちよっと、顔洗ってくるね」

「うん！よーく、洗うのよー！」

スタスタと洗面所に向かった奏は鏡を見たのか絶叫が家中にこだ  
ましました！

それを聞いて、ふたりはさらに爆笑！



水性ペンで書いたから、そこまで怒らないだろうと思ったけど。数分後に帰ってきた奏はしばらくダンマリを決め込んでいる。場の雰囲気グシーンとした中を凜太郎はスィーっと部屋から抜け出そうとした。

「凜！待った！」

いつもと口調の違う奏。

凜太郎もすぐみあがって、ビクッ！と立ち止まる。

「な、なに？おねえちゃん」

「はい、ふたりとも座って。正座して」

言われるままに、ふたりは正座。

落書きされた顔に爆笑していれば、それはもう犯人はふたりだとバレてしまっているようなもの。

「はい。では、顔を前に出して」

見慣れているハズの小悪魔みたいな奏の笑みは、むちゃくちゃ恐ろしい。

もう言われるがまま顔を前に出したら、おでこにデコペンされた。

バチコ ン！

「い、痛った い！」

「い、イテ ！」

ふたりともそのあまりの痛さに絶叫！

どれだけ指を引き伸ばしたら、そんな威力がでるのよ！  
って、くらいの痛みがおでこに走った。

「なんで、こんなことしたの？」

「だって…結華ねえちゃんが顔に落書きしちゃえって、えぐっ…」

凜太郎は痛むおでこをさすって、涙目になりながら事情を伝える。

「質問に答えてないわ」

涙ぐむ凜太郎に対して、冷徹に対処する奏。

横目で見ていても、めちゃくちゃ怖い…。

「では、結華さん。あなたはなんで、こんなことしたの？」

『さん』付けてきたー！

一国のお姫様みたいな、その口調と蔑んだ瞳…。

もうカンカンのご様子。

思わず、ワタシも『さん』付けで。

「あ、あのですね…奏さん。今日何の日か、ご存じですか？」

敬語にもなっちゃうくらい先輩並みに怖いけど、返答次第では優位に立てる。

「ん？今日？何の日かしら？」

「はい、ダメ！今日は奏さんと夏休みの宿題をする日でしたー！なんで、友達との約束忘れて寝ているのかしら？」

「ああ、そうだったね。忘れてた。じゃあ、宿題やるっか！」

あまりにもサラッと流されて、ワタシの反論はどこかへ飛んでいってしまった。

凜太郎は涙を拭きながら、部屋をあとにした。

早速、夏休みの宿題開始。

ふたりとも黙ったまま、時は過ぎていく。

エアコンの涼しいスーツという音だけが聴こえて、軽く1時間が過ぎた頃。

それに耐えられなかったワタシは。

「ねえ、奏。ちょっと休憩しない？」

「うん。もう半分、終わったしね」

「はやっ！」

「そう？結華はどのくらいまでいったの？」  
言えない。

合計200ページもある夏休みの宿題のたった20ページしか進んでないなんて、言えない。

「わ、ワタシも同じくらいかなあ？」

「ホントーじゃあ、あとで答あわせしよっか！」

「ううん、遠慮しておく。だって、写したりしたらよくないじゃない」  
「！」

「そう…まいつかーちょっと、飲み物とお菓子持ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

前言撤回、今のうちに奏の宿題写させてもらおうかしら！

40ページ…60ページ…よし、あと少しだ！

最初は奏が帰ってこないか、確認していたけど。

写すのに夢中になって、途中からその確認を怠っていた。

「よし…半分までいったー！」

「何が『よし…』なのかなー？」

「えっとー。それはそのー」

言い逃れができる現状ではない。

完全に奏の宿題を見開いて、ワタシの宿題の横に置いている。

今まさに、書き写している最中だった。

「もう…あんなに結華が写しちゃダメって言うておいて、それはないんじゃないの」

「ごめんなさい」

「まあ、いいわ。休憩しよー！」

許してくれて、ホッとした。

またあの蔑んだ瞳で見られたら、トラウマになって立ち直れない。

奏が持ってきたのは、クラッカーとその横にクリームチーズとジャムが入った容器。

「結構、手が込んでるんだね」

「お客さんだからねー。それなりにおもてなししないと悪いじゃない」

「あら、お客さん扱いとはうれしいー！」

「凜がかき氷を削っているから、もう少ししたらくるよ」

「ホントーやったー」

っと奏のケータイが鳴る。

「はいはい、マサあー うん、これから？うん今日は宿題しちやいたいから。えっ！ダメ！まだワタシも最終回見てないんだから！うん。じゃあ、明後日ね。その時にうん！じゃあねーバイバイ」

「今の『マサ』って、だれ？」

「あれ？言っでなかったっけ？彼氏だよ」

「ええ　！聞いてないー！」

「そっか、言っでなかったかも…ごめんね。でもそんなに、驚かなくて

「もいじじゃん！」

「か、奏はたしかに可愛いけどさ。マイペースだし、恋愛とかそういうのに疎いって、思ってたんだけど」

「まあ、確かに一理あるわ。でもね、告白されたんじゃあ付き合うしかないよね？」

「こ、告白ーい、いいなあ」

「でも、好きじゃなきゃーOKなんて、しないよ」

「そうだね。でっ！マサって、人はどういう人？」

「どういう人って、みんなが知ってる生徒会長だよ」

「ええー！あのみんなに優しくして、怒らない」  
「仏」の生徒会長なのー！

「うん、そうだよ ふうーん！いいでしょー！」

「ちょっと意外なチョイスだわ。」

生徒会長さんあなたって…とは言えず、幸せそうな奏はクルクルと回っている。

「い、いいなあ」

「ちょっと言葉が、引きつったけど。」

ふと…もし、汐凧君に告白したところで付き合えなかった場合。

ワタシのあの現象って、どうなるのかなあ…。

そう考えると、ちょっと不安。

「おまたせー！はいかき氷だよー！」

「わーい！ワタシ、メロン味ー！」

「じゃ、じゃあワタシはこっちのイチゴ味にする。」

「あれ？2つだけなの？凧太郎は？」

「ああ、オレは…」

「氷がふたり分しかなかったから、凧はないよ」

凧太郎の言葉を遮って口出しをしたと思ったら、パクっと一口食べて。

「んー！やっぱり夏はかき氷だわー！」

かき氷を絶賛する奏。

凧太郎の様子を見ると、どうやら暑い中一所懸命にかき氷を作っていたのだろつ。

汗ダクで、Tシャツがちょっと透けて見える。

「凜太郎、よかったら…ワタシのあげる」

「いいよ。オレは…アイス買ってくるから」

「こんな暑い中買いに行くのは、大変でしょ。遠慮しないで！はい」

「ゆ、結華ねえちゃん…うわあああー！ありがとうー！」

凜太郎は感動して涙を流しながら、ワタシに抱きついてきた。

小学生って、大げさね。

「あつー！」

奏が叫んだ瞬間にグシャと、イヤな音がした。

「な、なに？」

奏の視線を辿ると、かき氷は部屋中に散乱してしまった。

「あつ…あああー！」

それに気付いた凜太郎も感動から悲鳴へと、声を変えていた。

「かき氷…ダメになっちゃったね。仕方ない、おねえちゃんと一緒に

アイス買いに行こー！」

「ホントー！」

歡喜に湧く、満面の笑みの凜太郎は可愛い！

「うんー！」

ふたりにアイスを買いに行った。

真夏日という感じで、すごく暑い。

いつもなら凜太郎と仲良く手をつないで歩くけど、今日ばかりは手を繋げない。

凜太郎は暑さのせいで、へバリ気味だけど。

「結華ねえちゃんとこうして買い物するのって、久しぶりだね」

「うん。ちょっと暑いけど、ガンバって行こー！」

「おっー！」

凜太郎お得意様の駄菓子屋さんに着いた。

「オレはやっぱり、ガリガリ君！」

「じゃあ、ワタシはモナカにしよう！」

「おばちゃん！これお願い」

「はいよ、あれ？結ちゃんかい？大きくなったね」

実はワタシと奏も小学生の頃はここの常連さん。

今は遠い昔の話のようで不思議な感覚。

「うん！おばちゃんも元気そうでなにより」

ありきたりの世間話をしながら、アイスをふたりで頬張った。

「おねえちゃんのも買おっか！」

「あら、凜太郎！やさしいね！」

でも、ワタシの財布カラなんだけどね。

奏のアイスを持って帰ってくると、奏はまた黙々と宿題をやっていた。

「ほい、奏のアイスも買ってきたよー！」

「ホント！やったー！」

「凜太郎に感謝しなさいよね！」

「うん。ありがとう。凜！」

「へへっ！」

自慢気な、凜太郎も可愛い。

「やっぱ、モナカはバニラよねー！」

その点この姉は可愛気もなくパクパクと、アイスを食べている。

能天気なこと。

「結華ねえちゃん」

「なに？」

「オレ！大きくなったら、結華ねえちゃんと結婚する！」

「あら。じゃあ、早く大きくならなきゃねー！」

軽くゴマかすワタシと真剣な凜太郎。

「」の温度差ってやっぱ、年齢によるものかもね。

## 夏祭り

### Chapter 13 “夏祭り”

夏休み。

暁やツノキーは夏の大会に全力を尽くしている頃だろう。

オレは思いつきり、バイトを入れた。

週に4日は入っているかもしれない。

その理由は単にヒマというワケではなく。

来たる8月上旬の生涯初デートに向けて、ガンバっているんだ。

バイトを野村先輩が彼女とデートでサボった翌日。

シフトが野村先輩と一緒にになった。

「おはようございます！野村先輩」

「おはよう、ユウーおや、ご機嫌だねえ！」

「え、そうですか？はは…まあ…。それはさておき、野村先輩！先日バイト替わった時、どこへ行ってたんですか？」

「へっ…いや、言ったじゃないか。生徒会での集まりがあったんだよ」

まだ、シラを切るつもりなのか…こっちはすべて知っている。

「あの日、リサに聞きましたよ。デートだったんですって？」

野村先輩はすぐく、オドオドしながら。

「へっ…いや…その…ナンノコトヤラ？」

「あの日の帰りにバッタリ生徒会の先輩達とも会って、事情は聞いているんですよ。それでもまだ、生徒会の仕事と言い切りますか？ならば、その日のドラマ『夢の中へ堕ちる世界』の最終回知っていますよね？そうそう、あのクライマックスシーンは…」

ドラマのネタバレをしようとしたその時。

「わ、わわわぁー…ごめんな。その日しか、彼女の予定が空いてなくて…まだ、ドラマ観てないんだ！言わないでくれないか…！」

「言わないでくれないか？いやいや…いくら先輩とはいえ、その言葉使いはいかななものかと思えますよ。フフ…！」

「くっ…ドラマの話は勘弁してください。ユウ様  
もう、屈辱の表情を隠せない。」

野村先輩の表情はゲームで負けて、悔しがる小学生のよう。  
「ちょっと気分がいいなあ。」

「まあ、いいでしょう…ただし…」

「もう、いいだろうっ？」

「いえ、まだです。こっちもソフトチェンジしたい日があるので、代わってください」

「はあ、そういうことならよかった。いつがいいの？」

「8月の24日です」

「うん、わかった。溝口スタッフにもちゃんと伝えておくよ」  
「って、ここで小峰とツノキーとの約束はOKになった。」

野村先輩が居なかったおかげで、リサと付き合っきっかけをもらっ  
たんだ。

そんなに追い詰めてもね。

一応、貸し借りナシってことで。

リサとは付き合っているのはナイショにしながら、バイトをしてい  
る。

まあ、そのうちバレるだろうけど。

付き合っているとはいえ、普段通りの2人にしか見えないだろう  
し。

そんな、バイトに明け暮れている日々。

ある日、ソフトでリサと一緒にになった。

野村先輩も居ないということとで、オレが送ることになった。

「ユウ。どうせ送るなら、家に泊まっていかない？」

デートの前に泊まるというのは、また大胆なことを言うなあ。

「い、いいの？デートもまだしてないんだよっ」

「そっか、ユウは段階を踏むタイプなのね」

そういうワケじゃなくて、リサ自身が積極的すぎるんだよ。

まだ、心の準備もできてないのに…。

「な〜に赤くなってんの？やーね、男はすぐへんな想像ばかりする」



「そりゃ、ちょっと考えちゃうだろう」

「いいわ。じゃあ、デート行こー！そうね、プランはユウに任せる」

「おう、わかった」

「じゃあ、今日は送るだけね」

マジですか！

この時ほど、チャンスを逃したと思ったことはない。

かくしてデートのプランは任されたものの、生涯初デートで女性経験もないオレが見つけたのは“夏祭り”だった。

雑誌にはデートとしては、“初心者にもってこいのイベント”と書いてあった。

その理由はわからないけど、リサにそれを伝えると喜んでくれた。

夏祭り当日。

リサの家近くの祭りが行われる神社で待ち合わせ。

10分ほどはやく着いたけど、まだ来てないみたい…。

「ごめん、待った？」

「いや、そんなことはない」

一瞬、見蕩れてしまった…。

普段は髪をおろしている女性が髪を結ってアップしたら、こんなにも印象が変わるのか。

普通にアップしているだけではなく、巻いてアップというのに大人っぽさを感じる。

さらに藍色の浴衣姿に黄色と緑のふわりとラインの入っているのがまたいい！

「そう、よかった。じゃあ、まずはわたあめ」

子供みたいにはしゃぎながら、オレの手を引っ張るリサの後ろ姿…特に“うなじ”がくつきり見えて実に色っぽい。

子供のような振る舞いとは、正反対の大人の妖艶さ…。

存在自体が反則じゃないか！

わたあめを一緒にたべながら、そんなくだらない視線をリサに送っていた。

「今日、花火があがるんだよ！むっちゃ、楽しみ」

「そうなの？知らなかった」

「まあ、地元だからね！」

「あっ、ワタシのわたあめ持ってて。たこやき買ってくるー！」

「もう違うの食べるの？早くない？」

「さっきできたてのが2個くらいしかなかったから、今買わないと待たされちゃうー！」

「そっか。じゃあ、待ってる」

両手にわたあめを持ちながら、月夜を見上げる。

「よっ、ユウ！お前も来ていたのか？」

月夜を見上げている視線を妨げて、ワツッと野村先輩が入ってきた

「の、野村先輩！あれ？その横に居るのは…」

「おう、紹介するよ。オレの彼女の伊吹奏だ」

「汐風君。こんなところで会うなんて、偶然だね」

「なに、知り合い？」

「そう、同じクラスなんだ！ねっ！」

「うん…っつて」

「マズインじゃないか？」

「こんなところをリサが見たら、シヨックで固まるんじゃないか？」

それにナイショで付き合っているのに、野村先輩の彼女が同じクラス

の伊吹さんだなんてオレとしてもマズイ…。

椎名さん経由で暁とかにバレたら、からかわれるのはゴメンだ！

「ここは軽く話を流して離れよう！」

「伊吹さん、大会とかじゃないの？」

「まだ、地区大会だから夜は帰ってくる事ができるんだ。全国大

会ってなると、移動でこっやって会えないからね」

「そうなんだ…。じゃあ、これから大変なんだね」

「うんー！」

「じゃあ、一緒にいる友達が待っているんで」

「えっ！もう行くのか？」

「あっ、はい。2人のジャマするのも、悪いんで」

「そっか、気を使わせてしまったみたいで」

「いや、そんなことはないですよ。じゃあ、また」

「汐風君、またね」

どうにか振り切ったものの、肝心のリサを探さないと。

たこやき買っているハズ、だよな…。

いた！

「リサ…ちょっと、お祭りから離れないか？」

「えっ！まだ来たばかりなのに」

「じゃあ、たこやきを食べながらでもいいから。ちょっと、奥に行こう」

「ちょ、ちょっと、わたあめ持った手で押さないで！ついちゃうじゃないー！」

そんなことに構っていられるか！

この楽しんでいる時間が壊れてしまうのは、絶対避けたい！

「ふう…ここまで来たら、もう大丈夫だ」

「神社の中まで入って来て、おみくじでも引くの？」

「まあ、そんなとこ」

「あれ〜なんか隠してる〜！なにかあったの？」

また、人の心を読むのが巧みすぎ！

「それは言えない…。少しここでゆっくりしてよう。欲しいモノがあったら、買ってくるから」

「ふうん、まあいいわ」

ふたりで買った食べ物食べて、少し落ち着いた時に。

「…ちょっと待ってて、トイレ行ってくる」

リサは颯爽と走って行った。

相当ピンチだったのだろう。

とりあえずここに居れば、大丈夫だ、

10分経っても、帰って来ない…どうしたんだろう。

気になって、ケータイを鳴らしてみる。

着信音が近い！思わず、発信を切った。

そつと、神社の壁から様子を窺う。

「へえ、そうなんだ」

リサの声が聞こえる方向を見ると…。

「仲良さそうで、よかった。マサは結構頼りない時もあるから、

そんな時はガツンとやっちゃっていいから」

「はは、リサさんって面白いね。色々知っているんだマサのこと」

「リサ、あんま余計なこと言つなよ。これからやりづらくなるじゃないか」

「はは、ごめん。つい、口から出ちゃった」

ああ…野村先輩達と会ってしまったのか…。

「じゃあ、ジャマしちゃ悪いし、ワタシはこれで。友達も待ってるし」

「そっか。そつえばさっき、ユウが居たよ。もしかして、友達ってユウのことか？」

「へっ！ああ…違う、違う。普通に友達と会う約束してるんだ」

「ふ〜ん。じゃあ、またな！」

「リサさん。また会いましょう」

「うん！またね」

ふたりは人ごみの中へ消えていった。

見送った手と共に固まったりサ。

後ろから声をかけてみる。

「見ちゃったか…」

「うん…かわいかった…彼女」

見送った方向をずっと見ながら、話すリサ。

その背中は、お祭りに来た時とまったく違っていた。

今のリサの表情が手に取るようにわかる。

だから、そのまま後ろから続けて話しかけた。

「そっか…さっきオレも会ったんだ」

「そう、なんだ…。だから…ユウはやさしいね」

「楽しんでるリサにはふたりがいることを言えなかった…。ごめん  
な」

「うづん。どっちにしても…ここにいたら、会っていたよ」

振り向きリサの顔はもう…泣きじゃくっていた。

そのまま抱きしめる…。

強く抱きしめる。

「まだ、会うまでは信じてなかったんだ…。でも…もう目の当たりにしちゃつとね…」

「うん…わかった…もういい」

「ユウは知っていたの？ワタシがマサのこと好きだったこと…」

「それでもリサが好きだったことに、変わりはないよ」

「ありがとう」

楽しみにしていたハズの花火が上がる。

花火の音が、寂しく聞こえる。

その音が体の芯を揺さぶって、落ち着かない…。

失恋って、こんなにも気持ち悪くさせるものなのか。

遠くから好きな人をずっと見て何も行動を起こさない自分とは、リ

サは違う。

リサはすぐ傍で一緒にバイトして、一緒に帰ってそのままの関係で  
もいい…。

相手が恋愛対象として見ていなくても、傍にいれたらそれでいい。

それを選んだリサは傷つくの恐れて。

関係も壊したくなくて、告白しなかったそうだ。

でも…その反動はすごく大きい…。

今ではもうどうしようもない話を延々としながら…リサを家に  
送った。

## 気になって

Chapter 14 “気になって”

リサと約束していたドラマを録画したDVDを持って、同じシフトに入った日に渡そうとした。

しかし、その日リサは来なかった…。

心配になってメールや電話もかけたけど、一向に返事が返ってこない。

脳裏に最悪の事態が浮かんできた。

まさか、夏祭りのことを考えすぎて耐えきれず…。

自殺なんて、考えているんじゃないかと。

オレをひとりぼっちにさせて…。

居ても経ってもいられず、バイトが終わってすぐにリサの住むマンションに駆け付けた。

幸いにも合鍵を事前にリサからもらっていたので。

カギが閉まっただけでもとは、思っていた。

だが、ドアは無防備にもカギがかかっておらず。

部屋は暗いまま。

その瞬間、頭が真っ白になった。

おそろおそろの中に入っていくと、リサはベッドに横たわっていた。

少し躊躇しながらも、声をかけてみる。

「リサ？大丈夫か？」

「う…うん…ユウ…もう食べられないよ…」

…寝ボケているようだ。

腐抜けた寝言で安堵と共に、あまりに考え過ぎていた自分がバカらしく思えてきた。

でも、なんでバイト来なかったのだろう？

そう思って、リサの表情を見つめる。

頬が普段より赤くなっている。

よく見ると、リサの枕はタオルをかけた水枕のようだった。  
ほんの一瞬。

田舎のばあちゃんを思い出したが、それと同時に自分の手をリサの額に伸ばしてみる。

リサの額が熱い！

どうやら、バイトを休んだ理由は風邪だったようだ。

数時間経ったであろう、水枕を起こさないように抜いて氷を入れ直した。

その時、目に入ったシンクは洗い物の山で蛇口の先端まで積もっていた。

黙って見過ごすにはあまりに多いので、無心で洗い物に熱中してしまった。

次に部屋を見渡してみた。

女の子の家とは思えないくらい、散らかっている。

風邪をひいて何日か経っていたのだろう、ご飯は出前やコンビニ弁当で済ませていたようだ。

ピザの入れ物や、弁当容器が散乱している。

すぐさま有料ゴミ袋にどんどん入れて、片付けた。

下着も脱ぎっぱなしだし、洗濯物も取り込んでそっくりそのまま置いてある。

あれ？これは…黒一色の下着！

これが俗に言う、勝負下着なのか！

リサって、意外と大胆なのはくんだなあ。

思わず掃除を中断して、見入ってしまった…。

下着を横目で気にしつつ、掃除は完了。

さて、次はリサにご飯でも作ろうか。

冷蔵庫はほとんど空っぽ。

お米はあったので、洗って炊いておく。

一端リサの家を後にして、買い物へと出掛けた。

近くのスーパーで梅干し・卵・万能ネギ・鶏ガラスープの素、水分補給に最適なポカリスエットを買ってリサの家に戻る。

結構ガチャガチャと作業をしていたが、リサは熟睡して安心してた。

ケータイで心配していた溝口スタッフや、野村先輩にメールをしておいた。

と言っても付き合っているのはナイショなので、連絡とれたと伝えた。

そのあとは音量を極力下げて、テレビを見ていた。

ご飯の炊けた音が鳴り、急いでその音を消す。

買ってきた材料で作るのはもちろんおかゆ。

小さめの鍋を手に取り、先ほど炊けたご飯と水を入れる。

味付けは鶏ガラスープ。

さっぱりした味になるので、食べやすい。

最後に溶き卵を入れて、ふわっと仕上げる。

梅干しは好みによるので、小皿に入れる。

ちょうど、出来あがったくらいにリサが起きてきた。

「あれ？ユウ…なんで、居るの？」

「連絡とれないから、心配で来たんだよ」

「そっか。ワタシ…ケータイをサイレントモードにしていたんだ。睡眠をジャマされないように」

「でも、連絡はくれよな。こっちは心配したんだよ」

「うん、ごめん。そんな気力なくて…」

「そんなに、ヒドイのか？」

「ほら、夏風邪って長引くでしょ？だから、ムリに体動かすと余計時間

かかっちゃうかなって…。それに体がかったるいし」

「それもそうだな。ほい、ちょうどおかゆができたよ」

「わあ！ユウの手料理だ！」

「熱いから気をつけなよ」

「…うーん」

「…うーん」

「どうしたの？食欲ないの？」

「ユウが食べさせて…」

「そっか。腕を上げるのもだるいんだな…わかった。ほら、あーん」



「あーん…うん！おいしいー！」

「それはよかった。手料理を「ちそうするなんて、言っていたのに。最初がおかゆっていうのは、内心悔しいな…」

「そんなことないよ。すごくおいしいもの」

「ホント？うん…それはよかった」

「でもこれ、おかゆ」っていうより、むしろ「おじや」みたいだね」

「まあ、これがオレの母が作る「おかゆ」なんだ。こつという味の方が、味気ないおかゆよりおいしいだろ？」

「そうね。普通のおかゆって、おいしくないもの。ユウの作ってくれたこつちの方が、おいしい」

結構しゃべれるようで、なにより。

そのあとは気力が湧いたのか、リサは自分で食べるようになった。

「「ちそうさまでした」

「どういたしまして」

「じゃあ、洗い物したら帰るね…」

「えっ？帰っちゃうの？」

「長居すると、リサの体に負担がかかっちゃうだろ」

「もう今は大丈夫。ユウとはメールか電話しかしてないし、2日間くらい誰とも喋ってなかったから…。ねえ、今日は泊って行って」

「…うん。じゃあお言葉に甘えんとするよ」

「それにしても部屋がキレイになっているけど。もしかして、ユウが片付けた？」

「あっ！つい…あまりにも散らかっていたから、夢中で片付けちゃったー！「めんね」

「ううん、うれしい！ありがとう」

「ふう…一瞬怒られると思った。少し残念だったのは、下着が散乱してなかったことかな？はは」

ヤバッ！つい、口が滑った！

「あれ？下着も脱ぎっぱなしだったような…。あっ！ユウ、あんたまさか！下着も片付けたの？ワタシの断りもナシに？」

「下着も散らかっていたら、そりゃあ片付けるでしょ？」

「ユウ…ボロが出たわね…」

リサはベッドの横にあったテニスのラケットを利き手に持って、今にもこっちへ振りかざそうとしていた。

「ちょーちょっと、待って！ラケットは痛い！ラケットは痛いよ！」

「ユウのバカアァー！」

「ぐわあぁー！」

ラケットのネットなら、そこまで痛くはないだろう。

でも、リサは持っていたハズの柄の部分をおれの頭のとっぺんにぶつけてきた…。

「痛い…痛いよ！どんなハンドリングすれば、柄の部分で殴れるんだよ。それに恋人同士だから、別にいいじゃんか…」

「よくない！恋人同士でも触れていいことと触れられたくないことは、ちゃんとわきまえてよ！ホント…ユウって、ウチのママみたいね」

「えっ？どっついっことっ？」

「お世話焼きすぎるところが、そっくら」

「ふーん…リサは高校生にもなっても、ママって呼んでるんだ意外だな」

「はっ…」

リサは恥ずかしかったのか、言葉に詰まっている。

ただ、言葉が詰まった代わりにラケットを振りかざしてくるとは…。

まったくもって、想像していなかった…。

「はぐっしっ…」

もうオレの頭は、かなり陥没しているんじゃないか？  
と思えるくらいの威力を感じる。

「男と違って、女の子はいいの…」

「ドメスティック・ヴァイオレンス反対！」

「違うよ。これは愛情表現じゃなくて、照れ隠しだから」

「そんな…。愛情表現じゃないの？こっとなったら、やり返すしかないな！ほりゃー！」

オレはリサの脇腹あたりをくすぐりまくった。

「うひゃ、うひゃひゃひゃひゃひゃーちょ、やめてってば。うひゃひゃひゃひゃー」

どこぞのお代官さんみたく笑うリサにちょっと、引いた自分がいる。

思わず、くすぐる手を止めた。

「うひゃひゃひゃって…あれ？もう終わり？あー！」

気が抜けたオレはリサにのしかかる。

流れのままに見つめ合うふたり。

「キスしないか？」

「うん…いいよ」

そう言っつて、キスをしたあとは何もなかった。

「あれ？ユウ？」

いくら若いとはいえ、バイトの帰りにリサの看病&部屋のお掃除をするとはバテバテになる。

「ちゅっ…ん…んっ…」

呼びかけるリサの声は、遠くに聞こえる。

そのままオレは眠りに落ちた。

陽の光が目に入ってくる。

気付けばもう朝、横をふりむくとリサが寝ていた。

ひとり用のベッドでふたりなんて、結構狭いのに…。

リサは幸せそうな顔で眠っている。

その横顔を目に焼き付けながらも、トイレに行く。

トイレの流す音に気付いたのか、戻ってきた時にはリサはもう起きていた。

もう一度リサの寝顔を見ていたかったのに…残念でならない。

「おはよーユウ…昨日あのあと大変だったんだよー！」

「ん？なんかあったの？」

「覚えてないの？ユウがワタシにのっかったまま寝ちゃったでしょ？」

「そっか、そんなこともあったよ？な気もするけど」

「あのあとユウの体を起して、横に寝かせたの。結構強引に動かしたの」…ユウってば、起きないんだから…」

確かに、オレは一度寝につくと起きないけど。

「それは悪かったな…。せっかく、看病していたのに逆に迷惑かけちゃって」

「まあ、いいわ。いい予行練習になったって、ことで」

「まあ、お互い様って感じかな？」

「そうね。でも、あのいびきは一度病院に行った方がいいんじゃない？」ドかったよ」

「そんなに！シヨックだ」

健康には気を付けていたつもりだけど、そんなにヒドイとは…気を付けなきゃ…。

「でも、ユウが来てくれてよかった。実はね、夏祭りのこと少し引きずっていたんだ…」

「やっぱりそうだったんだ…」

「えっ！気付いていたの？」

「うん、それで家まで来たんだから」

「そうだったんだ…。でも、ユウに会ったことで落ち着いたよ。ありがと」

「うん」

勘違いから家まで来たけど、来てよかった。

## まだ何も知らない

Chapter 15 “まだ何も知らない”

夏休み。

ワタシは奏と待ち合わせをしていた。

海に行くのが決まってから、新しい水着を買いに今日はちょっと遠出。

大会はと言えば、バスケット部は全国優勝まであと少しと迫った全国ベスト4まで駆け上がった。

小峰の所属するラグビー部は全国ベスト8まで行けたみたい。

県大会止まりだったラグビー部にとっては、快拳だ！

と小峰は電話で、楽しそうに話してくれた

来年こそはという想い…でもその気持ちは…今は半分。

グループデートで告白がうまくできるか、ソワソワドキドキが止まらない！

結局、女子の3人目は見つからなかった。

男達と行くとは言っていないけど、原因はそっちじゃないみたい。

紫外線を気にする子が多いの！

メディアが今年の夏は紫外線が強いつて言うから、みんな肌を心配して辞退しちゃうし。

学生なんだから、そんなの気にしてちゃ外も歩けないじゃない！

「おまたせ〜。結華」

「うん、あれ？その人は？」

そのとなりには細身でありながら、つくべき所に筋肉がついている大人っぽい女性がいた。

「うん。」ちら、神楽更沙さん

「はじめまして、紫苑女子高校2年のリサです。奏ちゃんに今回海に誘ってもらって…」

ワタシが紹介する！って、言いながら前に出てくる奏。

「そうそうーなんか話しているうちにお姉さんって感じで、仲良くなっちゃってね」

「奏、出しゃばりすぎー先輩でしょー！はじめまして、神楽先輩」  
「まったく、奏はもう…。」

でも、これで女子3人は揃ったワケだし。

神楽さんも慣れてきているみたいだし、大目にみましょう。

「リサでいいよ。堅苦しいの苦手です。もう最初だけちゃんと挨拶すれば、それでいいの。呼び方は結華さんがいい？結華ちゃんがいい？」

「えっ…あはは…もう、好きなように」

軽い感じだけど、自然体でちよっと懂れるわあ。

1歳年上でこんなにも違うの？

ワタシはこうい風になりたいなあ…。

「ああっもうー立ち話もなんだし、モスで食べながら話そうよー！」  
奏に強引に引きずられながら、モスを食べに行く。

「奏ちゃんから、結華ちゃんのことば聞いているわ。1年でバスケットのスーパーサブって、スゴイー！」

「ありがとうございますー！でも、ワタシとしては、もっとスタミナが持続すればいいかなって。持って、第1第2クォーターだけですからね」

「ラン&ガンを主体として動くから、後半になると結構消耗するわね」  
「リサさんよく知っていますね」

「バスケットマンガを読んだり。何度かウチの高校と試合してるの、観たことあるもの。でも、全国ベスト4かあ…。ウチのテニス部にはもう雲を突き抜けて、無限大の宇宙くらい遠いわ」

「そんな、大げさなー」

「ホントよ。ありえないってくらい、部活に出る上級生なんか居ないんだから。1年生でうまくない子はボール拾いや、ネット張り替えしかさせてもらえないんだよ」

「そ、そんなことってあるんですか？」

「そう、世の中って想像もつかないくらいの部活って、あるのよ」

「そうなんですか…ワタシは恵まれているんですね」

「だから浄心のバスケット部には期待しているんだから」

「でもね、でもね。リサさんはね、スゴイんだよ！県大会シングルスで、2年連続優勝筆頭のエースを倒しているんだよ」

「ス、スゴイ！」

「奏ちゃん大げさね。でも…次の試合では燃え尽きちゃって、力の半分も出せないんだよ」

「でも、ホントスゴいですよ！エースキラーって、憧れます」

「そう？ありがと。やっぱり、優勝筆頭とかって聞くとこ胸が熱くなるのよね！」

違う部活の話でこんなに熱くなれるなんて、初めての経験だわ。

モスのあと、水着を買いに行った。

試着室は3つ並んでいる大きな水着ショップ。

夏の終わりも近いことから結構空いていた。

それぞれ3人が好む水着を持って、試着室へ。

互いの顔は見えないけれど、奏は横から声をかけてくる。

「ねえ、結華！パットは結構、詰めなさいよ。今のままじゃ、みんなの目の保養にならないんだから」

「いいじゃない！別にそんなの着ている人の問題でしょ？自分が気になっただら、入れるわよ！」

そう言いつつ、パットを詰め込むワタシ…。

胸の成長期って、まだこないのかな…とほほお…。

「奏ちゃんは豊満な胸があるから、結構肩凝るんじゃない？」

「リサさんですかあ？そうなんです。この時期は胸の下に汗疹ができないか心配で、いつもクリーム持ち歩いているんです…」

「クリーム塗ってるの！ちゃんと手入れしているのね。関心！関心！ワタシも2年のはじめになって、大きくなったから。今度、どのクリームがいいか教えてね」

ああ…胸の大きい人の悩みごとの話についていけない。

でもリサさんも2年になってからって言っていたし。

ワタシはこれから成長期っていつのも、ありえるわ！

2人は試着した姿を互いに見せあっているのを見て、自分との大きさの違いにビックリした。

奏は見慣れているけど、リサさんも大きい。

思わず、試着室へと後ずさりしてしまった。

「あれ？結華ちゃん。水着見せてくれないの？」

「今は見せません。楽しみは当日にとっておきましょう」

「とかなんとか言って、ホントは見せたくないんでしょ？」

「そ、そんなことないわよ…！」

「フッフ、ハハハ」

リサさんが笑うと、一気にみんなで人目もはばからず爆笑してしまった。



# pardon・generation

## Chapter 16 “pardon・generation”

8月24日。

暁&ツノキーと海に遊びに行く日。

リサも伊吹さんとどこかに行くみたい。

偶然にも、同じ時間帯に同じ駅で待ち合わせとなった。

でも、駅で会ったリサの服装がどうもおかしい。

「なんでリサ短パンにTシャツなの？」

「海と言えは、軽装が普通じゃない？」

「えっ！リサも海行くの？」

「えっ？言ってなかったっけ？今日はユウの男友達3人と、ワタシを入れた女子3人とで海に行くんだよ」

「き、聞いてないよ。そんなこと…」

そんな困惑している時に背後から声がかかってきた。

「おう、おはよ！裕司！」

「暁！今日は男同士で海に行くんじゃないやなかったのか！」

「ん？なんのことだ？今日は男女混合だぞ」

そんなことは一度も聞いてない。

「リサちゃん…」

「奏ちゃん…ん？」

！  
元氣よく伊吹さんに声をかけるリサの『ん』の音が、一気に伸びた

伊吹さんの方を見ると…えっ！

となりで歩いているのって、おいおい…勘弁してくれよ。

「おう、ユウ！早いな！」

「なあ、リサ…。今日野村先輩が来るって、聞いてた？」

「ううん…聞いてないよ」

「海は飢えている男共が多いからって、彼氏もついてきちゃいまし

たー！」

伊吹さんはリサの事情を知らない。

海に行くのに彼氏を連れてくるのはありえることだったが、傷心から少し立ち直ったばかりのリサにはキツイ1日になりそうだ。

その空気を感じとったりリサは小さな声で。

「大丈夫、ユウがそばに居るから」

「そっか。辛かったら、途中で離脱しよう」

「うん」

「」そと話していると、暁が話かけてきた。

「あれ？ふたり共知り合いなの？」

そう言われた瞬間にバツと離れ、オレは暁を見て。

「ああ、あつとバイトのせんぱい…」

「いえ、彼氏ですー」

「ちょ、おい…なんで…」

リサが言っちゃうんだよーとは言えずに。

内緒にしていたのに、それもそついつのをいじるのが好きな暁に言ってしまうなんて。

「えっ…そつなのー」

(マズイなあ。椎名にどつ伝えよう…今日この日をドキドキして待っていたアイツは…)

あれ？いじってこない…。

逆に体全身が固まっている様子。

「いや、暁そんな固まらなくても…。いつかは言おうとしたんだよ。でもなかなか言い出せなくてさ」

「ああ…。ちよっと、トイレに行ってくる」

相当シヨックだったらしい…。

一番身近な友人が彼女持ちだったというのが、暁の背中に重くのかかったみたい。

「やっぱな。ふたりの行動がなんか、あやしかったもんな」

暁とは対照的に小悪魔な細目で笑みを浮かべる野村先輩。

その横にいる伊吹さんは一瞬固まっていたようにも見えたが、すぐ

「っちを見て。」

「そうなんだ！じゃあ、やっぱり夏祭りの時に会った時はふたりと一緒だったんだ」

「そうだよ。ちよっとヒミツにしているのって、スリルがあって面白いと思って黙ってたんだ」

思考が止まっているオレの代わりに、伊吹さんと話を弾ませるリサ。

「この子は改めて、スゴイと思った。」

「おはよー。奏、リサさん！あれ？一番遅く来たのがワタシ？」

「おはよー！結華！ちよっと、トイレ行かない？」

「えっ！でも、来る前にトイレ行ってたから」

「いいの！トイレくらい付き合っつてよ」

伊吹さんが、今来たばかりの椎名さんを連れてトイレに行った。

「結華…。これから話すことを落ち着いて聞いてー」

「へっ？あっ…うん」

「汐風君…実は…」

「おーい！電車来ちゃったよ！もう行くよー！」

「えっ！は、はーい！結華！メールで伝えるわ。今はとりあえず電車

に乗ろー！」

「うん、わかった」

少し遅れてきたツノキーもついて来て、電車に乗った。

男子と女子に別れて、対面して座れるほど車内はガラガラ。

みんなが喋ると、その声が響き渡るほど。

「暁〜聞いてなかったぞお！女子3人と一緒に行くとか、これでナンパとかしなくていいじゃん！」

さっきまで、喋りまくっていたみんなの声が静まる。

「ツノキー実はな…」

ちよっと空気の読めないツノキーに暁は現状を小声で伝えた。

それを聞いたツノキーも小声で。

「ええっ！伊吹さん彼氏付きとか、シオっちも彼女連れとか！マジかよー！」

「まあ、そういうことなんだよ」

ツノキーは納得したと同時に大声で。

「あーもうー！残った椎名とかマジ眼中ないし！」

「角田！アンタ何様のつもり？ワタシだって、あんたに興味ないわよ！」

(今残ったって言った？なんのことだろう)

そのまま、殴りかかる椎名さん…まあムリもない。

「ヒイヒイ！し、椎名…暴力反対！」

「まあまあ…はは…ツノキーは当初の予定ではナンパだったんだろ？それに変わりはないんだから。いいんじゃないか」

そんな3人のやりとりみんなは笑って、電車は進んで行った。

海に到着。

「オレとツノキーはパラソル借りてくるから、みんなは先に着替えていて」

「うん、わかった」

木製でできた野生味溢れる更衣室で着替えている途中。

野村先輩が話かけてきた。

「なあ、ユウ。リサのこと大事にしてやってくれよ。オレにとって、妹みたいなもんだからな」

「はい。野村先輩に言われなくても、大事にしていますよ！」

「生意気なこと言うなあ。出会った当初はモジモジしていたクセに」

「今はもうそんなことないですよ」

そうオレは変わったんだ。

いや、素の自分が出せるようになった。

それは今までできなかったこと。

「椎名ちゃんって、着やせるタイプだと思ったけど、筋肉質なんだねー！ビックリしちゃった」

「リサさん。それは褒めているの？」

「うん、そうだよ」

「まあ、筋肉に肉がいった分。胸はあんまりないけどな」

「奏、アンタはまた余計なことを言ってる！」

「うわあ！結華ちゃんが怒ったあ！リサさん助けてえ〜」

「ふたり共ホント仲がいいのね フフ」

「あああもっ！椎名さん話逸らさないで下さいよ〜」

女子も着替え終わって、いざ！海へ！

やはり目の保養になる水着をリサはチョイスしてきた。

彼氏としては、ヒモパンの水着は少々周囲の視線が不安だけど。

容姿は最高だ！

ビーチバレーをする時も胸が弾む！弾む！

「ユウ！ワタシの胸ばっかり見てないで、ちゃんとボールあげなさい

よ〜」

「ああ、つい…ハハハ！」

そんなこと言われても、視線はリサに釘付けだった。

みんなでビーチバレーをするなか、パラソルの下でくつろぐ椎名さ

んと伊吹さん。

「メールするチャンスがなかったから。今、結華に言うね」

「うん、汐風君がとか言っていたよね？」

「そう、汐風君…リサさんと付き合っているんだって」

「えっ…！」

(ウソ！そんな…今日この日を待ちわびていたのに。)

いざ、告白って時にその事実を突き付けられるなんて…)

「気持ちわかるよ。結華…」

「ワタシね…。今日、汐風君に告白しようと思ったんだ」

「そ、そうなの！だから、今日のために…結華は…」

「うん。暁がワタシの気持ちを察して、セッティングしてくれたんだ。

ふたりっきりだとどどどしよつもないから、みんなで行けば流れで告白

できるだろって…」

「そっか。それでどどどするの？」

「どどどするも何も…。彼女居るんじゃない、仕方ないじゃん」

「でもね…結華。気持ちって、伝えないと一生後悔するよ。告白する

ことによって、状況が変わるかもしれないじゃない。あのふたりは付

き合って間もないんだし。それにリサさんは長い間ワタシの彼氏好きだったみたい。未練タラタラな感じで、よく彼氏の話をしているもん

「そうなんだ。じゃあ、リサさん今日は複雑な気分なのね。でも、スゴイなあ…。そんな素振りは一度も見せないで、楽しそうに遊んでる」

「気持ちだけでも伝えなよ。伝えないと一生後悔するよ」

「うん、わかった。奏！リサさんのこと教えてくれてありがとね」

「いえいえ〜 じゃあ、ビーチバレーの輪に入ろっか！」

「うん！」

2人はなんか神妙な話をしていたみたいだけど、元気にビーチバレーの輪に入ってきた。

もう、3人の胸に目が釘付け！

椎名さんは小さい胸だけど、スポーティーな水着で引き締まっている。

伊吹さんはポチャッとしている感じで、その豊満な胸はたまらない。

ツノキーもその迫力に押されて、よくボールを顔面にブチかまされていた。

オレはリサに注意されてガン見しなくなったから、その被害者にはならなかった。

みんなで競泳とかやってみたけど、部活軍団の前ではまったく歯が立たなかった。

ツノキーは競泳をするフリをして、そのまま他の女の子にぶつかっていった。

「ああーごめん、ごめん！つい、泳ぎに夢中になっちゃって」

「いえ、こちらこそすいません。泳ぐの、好きなんですね」

「うん、だけど…君と遊ぶ方が、もっと楽しいと思うんだ！」

「ふふ。ワザとぶつかって来たのね」

まったく、ツノキーは姑息な手を使うなあ。

そんなツノキーを放っておいて、みんなで昼食にした。

「野村先輩！今日は彼女の前ですし、みんなにオゴってください！」

「ユウ。お前こそ彼女の前なんだから、いい顔見せるべきじゃないのか？」

「ほほう〜そんなこと言って、いいんですかね？」

「な、なんだよ！もうお前に揺すられることなんて、何も無いぞ！」

「いやあ〜そんなことはないですよ〜」

「ま、まさか！まだあるって、いつのか？」

「そう、あの件をまだオレは引きずっていますからね。溝口スタッフにあのことを伝えたらどうなるか…」

「いったい、どうなるっていつんだよ」

「先日、溝口スタッフにこんな質問を投げかけてみたんですよ」

「な、なにをだ？」

『あの〜もしデートとか私情を挟んで突然、シフトチェンジしたらどうなりますか？』って

「そんなことをなんで…それで、答はどうなったの？」

『そんなことしたら、シフト週7日にするからね！汐風君もそういうことはシフト決める時に言ってね』って、言っていましたよ」

「ちよっと、待ってくれ！そんなことはありえないだろうっ！」

野村先輩のその固まる表情を見ながら。

「ニヤツと、ほくそ笑んでみた。」

「わかった！わかったから」

「ありがとございませう！さすが、頼りになるなあ〜野村先輩は！みんな〜今日の昼食は野村先輩のオゴリだった〜」

「おお、マジですか！野村先輩！小峰暁！ラグビーの先輩にはパシリばかりやらされて…先輩にオゴってもらえるなんて…。めっちゃうれいんです…」

「じゃあ、ワタシかき氷と焼きそば！」

「マサーラーメンとあとフランクフルト」

奏とりサも間髪入れずに、頼んでいく。

どこからか戻ってきたツノキーが来て！

「どうせなら、バーベキューしませんか？その方がより多く食べられますし。セットとかだと、意外とおトクですよ〜」

「えっ！それって、高くつくんじゃないやあ…。な、なあユウからも言ってくれよー！」

「いやいや、さすが！野村先輩！豪快ですねえ！みんなバーベキューにしようって、野村先輩が仰ってくれたぞー！」

「そんなことは一度も言っただろ…」

「の・む・らーの・む・らー！」

野村先輩が阻止しようとしたバーベキュー。

オレが筆頭になって、野村コールにしたことによって、みんなの耳には届かなかった。

このあとの数分間、野村コールが鳴り止むことはなかった。

ちなみに、バイトの話はすべてデマである。

校則上、バイトを週7日も入れるなんて、休学時以外は禁止なので無茶な話。

あまりの波状攻撃に、野村先輩もそこまで頭が回らなかったのだらう。

野村先輩が固まるのが最近楽しくて、ちよくちよくこの手を使っている。

学校では絶対に怒らないし。

みんなに優しいという意味で使われた“仏”の生徒会長がオレの中では（過去をグリグリとすれば）常に後輩に目をかけてくれる“仏”の生徒会長となるワケだ。

オレが口を割らない限り、野村先輩の株が下がることはなく。

今の状況はむしろ、自分の株があがることしかないことは確かなので。

本人もなかなかオレを怒ることはできないらしい。

いつまで通じるかはわからないけど。

最近、自分の属性がDSであることを感じはじめた。

お店では台のレンタルをされていて、食材は自分達で近くのスーパーやコンビニで調達した。

バーベキューは豪華なものになった。

串刺しになった牛肉&野菜、その横では鉄板を使って焼きそばを



作ったりした。

「うまっ！うまっ！」

「海で食べるとおいしいね！」

「か、帰りの電車賃しか…ない…」

そんな横で、ひとり食欲がない野村先輩…。

さすがに、みんなを煽りすぎたなあ…。

少しフォローしないと。

「野村先輩…さあ、食べましょっ！」

「そんな食欲ないよ…。今日はこのあと、アメリカのホームドラマのレンタルしようとしたのに…。いったい、誰のせいだと思っているんだよ…」

「いやあ、何言っているんですか？元はと言えば、野村先輩が自分で分の首を絞めたんですよ！」

あれ？フォローするつもりが、口から出たのは追いうちだった。

「っ、っわあ…」

叫びながら、海へと走って行く野村先輩。

ダメだ。

フォローするどころか、さらに追い詰めてしまいそうで申し訳ない。

「ユウ・マサをそんなに追い込まなくてもいいのに」

「ああ、リサか。うん、ごめんね。つい…口から出てしまって」

「そう。じゃあ、仕方ないね」

リサも結構ビドイ。

お互いに属性が一緒だから、「っやっつまくいっているのかも。

「まあ、これ以上は揺するビミツも知らないし。これで最後にしてお

くよ」

「そう？ワタシ結構マサのビミツ、知ってるんだけど」

「リサ、それあとで教えて。何かあったとき、使いたいから」

「うん、帰ったらね。でも、今日はユウのおかげで楽しい！マサや奏ちゃんも仲良さそうだけど。もう、それは引き裂く気もないし。あのふたりに負けないくらい今は幸せだから」

「うん、オレも今は幸せだよ。ちょっと待って、ふたりの仲を引き裂こうとしたの?」

「そうだよ。当然じゃない…」

ホント、この女というのは怖い。

昼食後にもまたみんなで遊んだ。

夕暮れ時。

「汐風君。ちょっと、いいかな?」

「うん、いいけど」

椎名さんに誘われて、みんなと離れた浜辺にふたりで行った。

他のみんなは疲れ果てていて、オレ達には気付いてないみたい。

「あっ!あのね…その…」

(ダメ!汐風君を見ながらだと、またあの時みたいになっちゃう!)

「ここは顔を見ずに伝えなきゃ!」

「うん」

なんか神秘的な面持ちのようだ。

「ワタシ…汐風君のこと…好きなのおお!」

海に叫ぶ椎名さん。

あまりにも大きい声で言われて、一瞬目がテンになった。

椎名さんがオレのことを好き?

「えっ!そんな素振り一度もなかったよ…」

眺みたいにブン殴られることはなかったけど、それを好きという風

にとらえるのは相当な勘違いだと思う。

もちろん、オレはそういうことはない。

「い、一度もなかったワケじゃないんだよ。だって、汐風君体育の時に

倒れたし…」

「ん?倒れた?確かに突然気持ち悪くなって、倒れたけど。それは椎

名さんとはまったく関係ないよ」

「あれは…。ワタシのせいなの…」

ん?まったく意味が分からない。

オレが倒れることと、椎名さんがオレのこと好きになることとどう

結びつくんだ？

考えにふけっっている間に椎名さんは話を続けた。

「ワタシ自身気付かなかったけど、『好きな人を見ると、その相手はいきなり倒れこむ』んだって」

「な、なにそれ？ どうやってたら、そうなるの？」

「わからない……。でも、今まで好きな人を見つめるとそういう現象が起きたの……」

「そう……なんだ……」

少し言葉に詰まった。

それと同時に話をしてる間は椎名さんが、ずっとうつぶしたまま話をしてた理由がわかった。

暁が伝えたかったのは、このことだったみたい。

その現象というのがすごく気になったけど、主題はそこじゃない。

椎名さんは勇気を振り絞って、オレに告白してくれたんだ。

それが一番大事なこと。

「うん、わかった。椎名さんの気持ちは素直につれしい。告白されたのなんて、リサと椎名さんだけだから。でも……ごめんなさい。リサのことがずっと好きで。今は付き合えたことで、毎日がすごく幸せなんだ」

「そつだよね。もし……リサさんより先にワタシに告白されたら、ワタシと付き合ってくれた……」

「そんなことはないよ。どっちが先とか、後とかの問題じゃない。大事なのはお互いに好意を持っているから、付き合つと思っんだ」

椎名さんはしばらくだんまりしていた。

それはほんの数秒間だけど、すごく長く感じた。

そんなカンタンに諦めがつくはずないよね……。

「うん……でも、ワタシが好きな汐風君らしい答えでよかった……」

椎名さんはオレの方を向いて、そう言ってくれた。

「あっ……汐風君……」

（やばい汐風君のこと見ちゃった……！

どっしょしょ……汐風君に心がすっきりした想いを伝えたくて、見ちゃっ

た！)

「なに？」

「あれ？汐風君…なんともないの？」

「そんなことはないよ。今の気持ちは確かに心がドキドキして、複雑な気持ちだよ」

「そうじゃなくて…。体が気持ち悪くなったり、しない？」

「うん、なんともないよ。そっか、椎名さんの言う通りなら、今頃体育の時間みたいに倒れていたかもね。でも、今はなんともないよ」

「あれ？じゃあ…」

「治ったっていうことで、いいのかな？」

(ウソ…こんなことってあるの？)

今さっき失恋したばかりなのに…。

心が晴れて今の状況ではへんだけど、「うれしい」って気持ちが溢れてきた)

「クスっ！ふっ…あはは…アハハハハハ！」

いきなり椎名さんは、誰かにくすぐられたように笑いはじめた。

なにかが、吹っ切れたみたい。

でも、今そういう場面じゃない気がするけど。

「えっ？どうしたの？いきなり笑うなんて、オレそんなへんなこと言っただけ？」

「あっ…うん、そうだよ！今、笑うところじゃないよね？うんとね。今まで『相手が倒れる』って現象がトラウマになっていて、直接告白ってできなかったの。ワタシは今日始めて、告白したんだよ。告白したら…汐風君を見てもなんともなかった！それがすごくうれしくて！なんだろう…なんか今のワタシって、へんだよね？」

「そっか…うん…へんじゃないよ！治ったのかもね、その現象。おめでどう？でいいのかな？」

「うん！ありがとっ！」

「おーい！帰るぞー！ふたりでなにしてるの？」

遠くからツノキーの声が聞こえた。

今の状況…なんて言えばいいんだろう。

なんか後々めんどくさいなあ。

「海に沈むキレイな夕日を見ていたの!」

椎名さんはそう言ってくれた。

ロマンティストなフリをして、その場を丸くおさめてくれた。

オレは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「今日はありがとう…椎名さん。これからもこんなオレでよかったら、友達として付き合ってくれる?」

「どっ…しよっかなあ…」

椎名さんは軽く笑みをこぼしながら、沈みこんだ表情になっってしまった。

それに気付いて、オレはすぐさま切り返した。

「そうだよな。今の状況で友達になるなんて、難しいよね…」

「うーそ! いいよ! これからもよろしくね!」

「なっ! 今の表情はサギだよ!」

「そんなの演技に決まっているじゃん! 女の子を甘くみると、痛い目に遭うから気をつけてね!」

「演技…だったの…」

呆気にとられて、そのまま立ちつくしてしまった。

少しずつ笑えてきた。

はじめて椎名さんとまともに話をしたけれど、こんなにも面白い人なんて気付かなかった。

さっきは「リサさんより先にワタシに告白されたら」って、問に答を出したけど。案外、答とは反対に椎名さんに惹かれていったかもしれない。

帰りの電車では、みんな疲れ果てて寝てしまった。

オレはリサと互いにもたれかかりながら、眠ってしまった。

見せつける気はないけど、遊び疲れたし仕方ない。

その中で椎名さんと覗がなんか話している…。

でもまぶたが塞がってきて、オレも眠い…。

「そっか。椎名は裕司に告白したんだ。それにしてもすごく清々しい顔しているのはなんで?」

「そう！今は気分がスツとしているの！なんでわかる？」  
「ん？うん…わかんないや。普通「こう」いう時って、泣き崩れたり心「こ」にあらずって感じて放心状態になると思うけどなあ」  
「「こう」いう時は鈍感なのね！あっ！でもそれもムリないか。「ワタシにしかわからない感覚」だものね」  
「椎名の感覚？そんなの誰もわからないよ。人の考えていることなんてわかったら世の中かなりうまくいくよ」  
「それもそうね」  
「なあ…。椎名」  
「ん？なに？」  
「今度はふたたび海に行こう」  
「えっ？それって」  
「うん…そういうこと」

高校生。

恋愛、部活、バイトと大忙しだけど、人生の中で一番時間を長く感じられる世代。

そんな中にオレは今、溶け込んでいる。

中学時代のように毎日が淡白に過ぎていった時期とは違って、今はすごく充実している。

たった半年くらいで、「ここまで周囲が変わるなんて思ってもいなかったけど。」

勇気を出して、この高校に入学してホントによかった。

終わりー